片

2
0
2
3

u_

一月

這い回る囁き声など聞かなかったと
（耳など有るなら）
耳を塞ごうとすると吐き捨てられたように
底無しを驕るかな囁き声は重く粘り着き
粘る儘に透けて凍るような滑らかさに沿って震え
鋭い程に柔らかい響きを
（耳など無かろうに）
耳から垂れ流して外の音を絡み付かせるらしいにしろ
外には音など無かろうに　それとも外など無かろうに
無い外には外が有るかに驕るかに嗤うかに
囁き声なら囁き声でしか無く這い回る　きっとそれは

声でも無く這い回るでも無くて唯
な唯それだけな独りを恃めるのなら恃んで
無い外に有って迫り来る外を刺し貫く鋭く尖った姿で
その姿な儘に
な姿の消える儘に
な置き換えにだけ望みを繋ぐ
な姿は姿でも無いなら無いで
うっかり囁き声かに聞こえて仕舞った
（なら何だろう）
なそれに匿われた甘ったるい震えなどを掬い取り　いや
掬い取ったのなら却ってそれに掬い取られたに違いない
その為の甘ったるさだったに違いないけれど
掛け替えのない甘ったるさを手に入れた心持ちを喜んで
うっとり囁き声に耳を澄ませるのも悪くはない　その
悪くはない限りになら無い外など弾き飛ばし（そうだ
そうだ　そうして）
囁き声もそれを聞き取る耳にしても確かな姿を現そうか
にしても

な望みに
掛け替えのない甘ったるさを奪われるしか無かろうかな
透けて凍るような滑らかさに沿って震えるそれを追う
置き換えも儘ならない確かな姿を身に引き受けもし
這い回るようにして囁き声を撒き散らすのは…
二〇二三年一月十五日

耳など有ろうと無かろうと
(擦り切れて無くなってしまった耳なら
そんな儘に有るのかも知れない)
そんな耳で何を聞こうと聞くまいと
唯一つ限りの響きが行き過ぎるに違いない
けれど　に違いないなどと言い立てるのは
ひょっとして違うのかも知れないからなら
その違うのは何だろう
と足を止めたのか　けれど足は始めから

滑るように凍るように
止まるように過ぎ行くように
唯一つ限りの響きに囚われ
それとも
そんな足で外を出歩いたりしたせいで
唯一つ限りの響きに行き会ってしまった
に違いないならまた　その違うのは何だろう
な
その違うのは何だろう
が次次に折り重なって　それが
唯一つの響きではないのか
そうに違いないのか違うのか
の違いをすっかり溶かし込んでか
違いないとも違うとも違っては
その違ってとは確かに違わずに
滑るように凍るようにしてしか
唯一つの響きは一つでしか無く
行き過ぎる儘な姿で何時までも

何処までも覆い被さろうかにも
二〇二三年一月十六日

青空を覗き込むと
青空は耳の穴に違いなく　その
青空と同じ深さの耳の奥底を見上げ
舐めるように眺め回す内に　そこは
青空とも耳の穴とも知れなくなって
色も音も　きっと重過ぎるのだろう　それらの
すっかり抜け落ちた後に現れるのは
明るみなのか　明るみにしても
それも覗き込むしか無いのなら
細かな痺ればかりが細かさの果ても無く　それとも
その果てが痺れるばかりな柔らかな暖かさの拡がり
それとも　そうとも知れなくなって
痺ればかりが爆ぜる明るみが一塊に晒され

そんなそれに覗き込まれるのを拒まれれば
翻って真下に小さな穴を開けたような影に
目を落とすしか無かろうけれど
その影の更に奥底までを覗き込めなければ
真下を向いた目は弾き返されるに違いない
しかし何処へ　真上へか
そんな真上が何処に有る？
向きは一つ限りにしか無い　つまり
真上と言うなら真下がその儘に真上なのだ　つまり
こんな事らの悉くを逆様にして仕舞えれば
こんな事らの悉くは一つ限りの向きを残し
痺れればかりが爆ぜる明るみの中へ消え失せ
独り影の奥底を細かさの果てかに覗き込むのは…
二〇二三年一月十七日

時を違えたらしく

行き会えなかった　その唯
行き会えなかっただけの其処に
違えられた時だけが
違えられたからなのか
動きを止めるから居残るのなら
そこに戻ろうとする何もが拒まれよう
けれど　そんな其処さえも拒まれようなら
違えられた時の居処もまた失われ
違えられた儘に時は何処へも直れない
な消え失せない限り止まり続けよう時に
行き会い向き合うしか無くなって仕舞い
いや何時何処で行き会い向き合えるのか
と尋ねられるのなら尋ねられるのも
居処を無くしても消え失せない
違えられた時ばかりでは
な時が有りもしない自らの姿に巻き込まれ
巧く行けば巻き戻される振りなどもして
時の違えを直そうと試みようけれど

な有りもしない自らの内を向くばかりでは
何を試みようも無かろう
な
何を試みようも無かろうに試みようとはされる
それに限れば時と処を得てそれを用いても居よう
にしろ
な事も違えられた時の内向きの内に限られよう
な限られるばかりに内向きな内で
何を違えようも直しようも無かろうか
としたら違えられたのは時の違えなのかも知れない
それとも時など違えようも無いのかも知れない
な　かも知れない　を探るには時の何処に…
二〇二三年一月十八日

この世の狭さを隈無く見渡せるかに
酷く見晴らしが利くようなのは

眺められる眺めに収まる悉くが
そうで有るしかない儘に有り続けながら
ならば時は失せてように
時もまた　そうで有るしかない儘に有るらしく
眺めの中の悉くは変わるしかない儘に変わって行く
そこに身を置くに違いなくにも　その眺めと共に
そうで有るしかない儘に有り続けられようか
それが　この身ばかりは酷く覚束ないかで
な覚束なさに耐え切れず　探せるなら
探さなければならないのは　きっと
抜け穴か　そんな何かだろうけれど
な抜け穴らしきものも
眺めの動きようもない真ん中辺りに静かに
そうで有るしかない儘に始めから有り続け
嫌でも覗かれて仕舞うにしろ
穴は塞がっている　それとも
穴は埋められている　それとも
穴は埋められ塞がる姿を晒してこそ

穴に為るしか無さそうで　或いは少なくとも
穴として見付けられるしか無いらしい　な
らしさに　独り
惹かれるでも無く　それを拒みたいでも無く
そんな事で穴は　この身と何の係わりも無い
唯穴だけの事を遣ってそうで　ならばそれは
穴とはまるで異なる‥
二〇二三年一月十九日　為（な）る

直ぐにももう死ぬのだと分かって仕舞えば
死ぬのなどどうでも良くなって　いや違う
生きるのこそまるでどうでも良くなって
これまで生きたのもどうでも良くなって
生きるのも生きたのもどうでも良いのなら
死ぬ筈のもう直ぐの直ぐが何時なのかも
さっぱり分からなくなって来て

死ぬって何だっけ　と考えても
それは（生きるのがどうでも良くない限りには）
ずっと考えて来た筈だろうに
その　考えるのが何かまでも
さっぱり忘れて仕舞ったようで　ならばうっかりとも
どうでも良い儘に何時までも生き続けられそうで
にしろ「
忘れたからって　それが無くなる訳でも無いよ
直ぐにもう　死ぬのは死ぬに違いないよ
それとも　もう疾っくに死んでないか？
」などと少しだけ何かを思い出せそうで
けれど　何も思い出せる事も無さそうで
そんな事が繰り返される程に増して行く苦しみに
ほんの僅かずつ追い詰められて行くようで　その
ほんの僅かな中に
生きられる事へか死ねる事へか知れないけれど
（どっちだろうと知った事でも知りたくも無く）
望みなら望みらしい柔らかな手応えが伝わるようなら

その伝わって来る向きを向いてさえ居れば
そんな望みもまたさっぱり忘れて仕舞えて
苦しみでさえ何とでも為りそうに　けれどその
何とでも為りそうにだけがどうにも為らなくて
凝っと待ち焦がれなければならないのは　何か
二〇二三年一月二十日

目に入るものはどれも透けるかに澄み渡り
見晴らしが利けば利く程に
眺められる眺めは濁り果て
な
澄むと濁るが同じ一つでは
その一つの中に一つ塞がる姿を晒す穴は
晒される限りに晒されるしか無くに失せ
な失せ痕から流れ出るように拡がるのは
一つな筈な澄むと濁るの境目に沿うかな

失せた穴が乞い焦がれたかな
開かれた穴の奥がぐるりと裏返され
穴一つ有り得ないつるりとした外ばかりな眺めで
けれど　それでも
穴に換わるものが一つだけ足らないのも確かなのは
その外の眺めが
穴一つ有り得なくてしか有り得ないからで　ならばと
な穴から遣り直し　穴を片付けようにも
失せた穴に立ち戻るのも為らず
足らない一つを外ばかりな眺めに擦り付ける振りを重ね
失せた穴に拠って失われたそれを取り戻そうと…
二〇二三年一月二十一日　擦（なす）り

隈無く一つの眺めに見晴らしが利こうと
その見晴らしは見晴らされる眺めに届かずに
眺めは全く柔らかく凍るように弛く閉ざされ

柔らかく弛い儘に硬く距てられ
顧みれば
全ては眠りから始まって　だとしたら
何一つ眠らない処がこの世の終わりなのだ
などと言う考えも　直ぐに
ほんの思い付きに過ぎなく思えて
ほんの直ぐ先の何一つ眠らない処へと
細切れに溶けて散り散りに消えて行くようで
そんな事らが見晴らしの全てで
この世の終わりの全てと見切るしか無かろうにしろ
そんな終わりは全く見切れないで　そう見切れない儘に
見晴らしの届かない眺めとの距たりだけを見切るなら
何一つ眠らない処がこの世の終わりなのだ
などと言う考えに　直ちにまた
立ち戻りたくもなるけれど
それとも立ち戻れないにしろ
その考えは全く有りの儘のその通りで有り過ぎて
顧みれば顧みられる処など有る筈も無く

そう顧みられる先に見晴らしが行き着けるなら
この世の終わりなど　間違いなく取るに足らない
ほんの思い付きに過ぎないのがまざまざと明かされ
何一つ眠らない処へ向けて眠り込み眠り扱ける夢が
淡く叶う儘にも
眠らない眠りかとも断ち切られようかに拒まれ果て
二〇二三年一月二十二日

狭さに色は無いので
狭さの形だけ探ろうとしていた
狭さの襞まで弄ろうとしていた　狭さは
曲がっても尖り続ける向きに拘り
必ず偏っている筈で
その偏りの縁を僅かにも掠められるなら
狭さに探られる形は無いと知らされようから
けれど狭さの厚い柔らかみの締め付けに

偏りは色も形も有る広さへと靡くかして
偏りな儘に狭さを抜けようと捩れ　に唯
色も形も無い広さが思い掛けず見出され
その広さにすっかり囲まれて仕舞っては
その広さに始めから色も形を探れなくて
狭さの中などよりまるで身動きが叶わず
いや　そんな　広さの中は狭さより狭い
とか　そんな事では無くて唯
狭さだけが有り　広さだけが有り
その狭さと広さとが少しも係わらない
狭さの外でも広さの外でもあるに違いない
そんな処で
そんな処の形を探ろうとしている
そんな処の襞を弄ろうとしている　しかし何故
形さえ探り当てられない儘に襞なのか　なら
きっともう形など知らず諦めて仕舞い　替わりに
形の定まらない襞に望みを繋ごうとしてそうで　にしろ
うっかりそんな襞を手繰り寄せようとすれば

この身の形さえ定まらない処へ攫われそうで

二〇二三年一月二十三日

この身がこの身で有る限り　その
この身をこの身にする形が
必ず有るにしろ　その形は
（それが何処に有るのか知れないけれど）
その形では無い　と
見えて仕舞えば
そんなのはまるで当たり前の事で
何処の何の形だろうと　その形はその形では無いし
この世がそんな形ばかりなら
形が形では無い　と
思えて仕舞えば
この身がこの身では無いのも明らかで　そんな
この身をこの身から救い出そうにも　それは

この身のこの身で無さに阻まれて　そんな
この身でずっと有り続けるなら　そんな
この身に繋がって
この身と係わる悉くも
それらがそれらでは無い儘に　そんな
それらでずっと有り続けるしか無く
それらとこの身がそれらとこの身では無い　そんな
無さだけがずっと有り続けるにしろ　な
無さが無さでは無い　そんな
無さの無さが
この身一つを取り囲み
この身限りの形を　その形で無くし続け　そんな
それでもこの身ならこの身を
形が形では無い中に抛り出し
形が形では無い形に徒に擦り寄らせては
そうしなければ知れなかった形を次次に
その形で無くして行く　そんな
この身が顧みられる形の形では無い形を…

二〇二三年一月二十四日

形が形では無い事など何の事でも無い　そんな
何の事でも無い事しか無い　けれど
必ずそこへ
向かおうとしなければならない目の前が
目の前では無い　にしろ　そんな
目の前が目の前では無い事など何の事でも無く
なのでこそ　そんな
目の前へ向かおうとしなければならないけれど
そこへ向かおうとしなければならない　は
そこへ向かおうとしなければならないでは無い
のも確かなら
な確かさなど　さっさと見放し　とはつまり
確かが確かでは無い事を離れて　唯
確かが確かで有るだけの

そんなのは偽りと分かり切ってようと
な事の中へ
な事と係わろうと身構える振りだけはするなら
何だろうとあれもこれも思うに任せ取り留めも無く
あれもこれも呼び寄せ交わり弄り回して
何処へでも出入り出来よう　そんな
この身は次次とこの身で無くなりながら　そんな
この身の儘に　何時しか
この世と逆様でしか有り得ないかな心持ちで　けれど
そうさ何事も心の持ちようさ
何事も心持ちに限られよう　などと朗らかに
嘯きたくなるのは凝っと堪え
（心の持ちようで済むのならこの身こそ始めから偽りだろう）
そこへ向かおうとしなければならない
か　そうで無いかなど知った事でない　そんな
そこがそこなのは偽りの
偽りでは無いのと逆様な　そんな
逆様が逆様な儘の振りだけはしようとしなければならない

その　しようとしなければならない　は
しようとしなければならない振りで
二〇二三年一月二十五日

繰り返しが繰り返し繰り返され
それでも擦り切れたりはしない
そんな繰り返しに唯一つ限りに映り込んで来るのは
そんな繰り返しの奥に覗く
繰り返しの終わりなのか
それとも繰り返しの終わりの終わりなのか
これは
繰り返しは終わる為に繰り返されるのか
切りも無く終わらない為に繰り返されるのか
それを繰り返し自らが試している
と考える事は出来ても
繰り返しがそう考えている訳では無く

繰り返しの奥を覗き込もうと
繰り返しに限り限りまで近付きながらも
繰り返しから締め出され拒まれる儘に
繰り返しとの距たりを計るのを怠らずに
繰り返しを眺め続けてしか自らを保てない
繰り返しを唯突き抜けたいだけの
一つ限り
がどうしても考えて仕舞う事で　いや
それが一つ限りなのは　その一つ限り限りにだけで
その限りで無くにも　それが一つ限りかどうかは
その繰り返しとの係わりが
すっかり見極められてしか分からない　にしろ
そんな見極められこそまるで分からなくて
それで一つ限りがその限りに一つ限りなのも確かで
いやそれとも
そんな確かさこそ繰り返されなければ確かでは有り得ない
のも確かで　何故なら
一つ限りにだけの一つ限りに何の確かさを確かめられよう

確かめられる筈は無く　確かめるには一つ限りな儘に
繰り返しとの係わりに決まりを着けなければ　と
繰り返しを突き抜けようとする
その突き抜けられる一つ限りにまで
一つ限りを間違いなく一つ限りにしなければならない
けれどそんな事はそうして繰り返されるしか無さそうで
そんな繰り返されるしか無さそうな限りの一つ限りな儘に
一つ限りは一つ限りの繰り返しの終わりと終わらなさの間で
一つ限りを自ら棄てるしか無かろうか
その限りな一つ限りを望むかにも
二〇二三年一月二十六日

向きは回るばかりで　ぐるぐると
道など有り得ない処を通り抜ければ
必ず目の当たりにされるのは
向きを定めて動かない道の他に無い

（道が見当たらず道に迷うようでさえ　そこには
それぞれ向きを定めた道が張り巡らされ
そんな中に身を置けばこそ道に迷う事も出来よう）
けれど　その
定められた向きが何処へ向かうのか
道を通り抜ければ何処へ辿り着けるのか　は
何も明かされない　そんな道は
ひたすら真っ直ぐ行こうが横道に逸れてばかりだろうが
その道の終わりに向かって進むしか無く
そんな一つ限りな向きの突き抜けた先に
明かされなかった何かが明かされる訳だが
そこは
向きは回るばかりで　ぐるぐると
道など有り得ない処を通り抜ければ　な
繰り返しを避けたいのなら（分かり切ってよう）
必ず道に迷い留まり
向きの定まる道をも　ぐるぐると
力尽くでも回し続けなければなかろうに　そんな

何も明かされない　その明かされなさの明るみに
迷い留まる目などは直に潰され
そんな潰された目は　ぐるぐると
一つ限りな向きを突き抜けようとするしか無くに
二〇二三年一月二十七日

二月

見上げさえすれば直ぐに
真上を見上げられたのは
真っ先に真下を見下ろして居たからだ
と分かって改めて真下を覗き込んだろうか
そんな上も下も見当たらなくて　それとも
上と下とが一つに纏まりそうにも纏まれず

歪に歪むようでも歪み切れずに
僅かずつ下から上へ上りながら
な上りは上る程に僅かずつ
その上っただけの重みに項垂れるかに
ゆるゆると下る　にしても下り切れない
その向こうに
そんな向こうは向きを変えてこちらを向くばかりな
いや　向きなど少しも変えずに　それは
こちらを向きもせず　けれどその向こうをも拒んで
いや　何も拒めなくて　そんなそれは
そんな姿を晒して蹲ってそんなそれで
にしろ
そんな姿で有る筈は無くて　に　それはそんなそれで
そんな　そんな姿で有る筈の無さに貫かれ　それとも
自らをその無さで貫きたくて貫けずに
そんな貫けない姿でその姿を貫き
その儘に貫き抜けたろうかな…
二〇二三年二月十三日

あぁ　この先が唯真っ直ぐだけなら
唯その儘に真下だけが何処までも真下へ真下なら
その後にも先にも　そんな真下さえ無かろうに
な無かろう真下へ墜ち果てるだけだろうに
まさか真下と真下が真下で真っ直ぐに交わって
そんな形を描くようなら　そんな形だけが独り形で
な形を　さも真下に覗けるかに覗き込む構えを強いられ
と強いられたばかりに
な形から浮き上がる限りに浮き果てた
真下と真上の互いの切れ目が背き合う
独り形の狭み尖る縁に危うく縋り付き
それでもどうにか立ってては居ようかな
いや
そんな形を描こうと
初めから独り

真下と真上より高みに突き上げられ圧し込められ
見晴らしだけは
真下と真上の切れ目の奥に拡がる遥か先を…
二〇二三年二月十四日

ここが何処なのかを知っている
少しのずれも暈けも誤りも無く
けれどその他に何も知れなくて
そうと知っているとしか知れなくては
ここが何処なのかに就いて
ここが何処なのかを知っている
その一つの他に付け加えられる何も無く
けれどそれで何が足らないでも無いのなら
ここが何処なのかを知っている
と知れたのなら他に知れる事など知れてよう
いやそれとも

ここが何処なのかを知っている　は
ここが何処なのかを知らないのと少しも変わらない
のではないか
少しのずれも暈けも誤りも無く
その
少しのずれも暈けも誤りも無いのだけは全く確かで
何がそれを確かにするのだろう
と顧みられるのは
ここがここで有る為の
ここから遡られる限りの何処かしかなかろうけれど
そんな何処かに就いて何も知れない
その知れなさを　そうとも知れずに
確かさと擦り替えられているのかも知れず
二〇二三年二月十五日

唯の一つも

考えられる事は無い
何故なら全ては分かり切っているから
（分かり切っているのも分かり切っていた）
なのに何故　ついうっかりとも
何かを考えられると考えられて
何かを考えているなどと考えて仕舞うのか
それは唯
考えられる事は無い
その透けるように軽く乾いてささやか過ぎる
そんな事に耐えられないからだけなのか
それとも
考えられる事は無い
とだけは考え続けたくて　その為に
考えられない事を考え続ける振りをしては
そんな振りのささやか過ぎる虚しさを
常に確かめないでは居られないからか
としたらその虚しさは救いであり楽しみであり
唯一つ身を守って呉れるものには違いない

けれど　その透けるような軽さを離れ
考える振りの虚しさを棄て
考えられる事の一つも無い儘に
二〇二三年二月十六日

通して見れば
始まりと終わりでは常に終わりが正しいと認めなければならない
それとも始めから終わりしか無かったとも認めなければならない
けれど
常に誤りと認めるしかないなりに
それとも終わりしか無かったなりに
始まりは有ったには違いない
そんな始まりとは何だったのか
それとも始まりが無ければ終わりが無いのも全く確かなら
ここでいっそ
始まりと終わりでは常に始まりが正しい事にしてみよう

始まりさえ有れば終わりなど有っても無くても構わない事にしてみよう
にしろ
そんな始まりが始まりである為には必ず終わりが無ければ
それは始まりには為らないのも全く確かなら
始まりと終わりは一つに違いなく
その一つを終わりから見ると始まりに見え
始まりから見ると終わりに見える
と　そんな事らしいにしろ
その　そんな事とは何なのかを
通して見ようとするしか無い　その
見ようとする始まりに激しく凭り掛かるしか無くにも
二〇二三年二月十七日

三月

呼び掛けられたには違いないけれど
振り向かない限り　呼び掛ける者は
後ろには居る筈もないし
前を向き続ける限り
前にも居ない
らしい
らしいだけでは前も後ろも覚束なく
いや
前も後ろも無い事にしなければ
呼び掛けられた事からして　無くなって仕舞おう
と構えた身を固め
その身を重く尖った石のように擲つなら
自ずと道は
弛く丸みを帯び
空の青を重く映し
風が吹けば捲れそうな薄衣のような
低い拡がりの真ん中を真っ直ぐに延びて行こうか

な
温い望みの覚束なさのせいで　行き成り
呼び掛ける者に鷲掴みにされ
二〇二三年三月六日

昼とは違う　夜でも無さそうな明るみに
道は塞がるのか　塞がる程に脹らむ程に沈んで
それとも一雫の露の重みに拉がれて
道は道で無くなって
そんな一雫の中に身ごと紛れ込んだようで
見上げれば露は空と同じ大きさか
それともその一雫が空を空より高く脹らませ
その高みから真下を見下ろす目なら知っている
その目からなら道は塞がるどころか
昼とは違う　夜でも無さそうな明るみを
厳しく分けるように延びて行くのを

隈無く見て取れように
そんな見て取れたかな道がぼんやり思い浮かび
思い浮かんだ儘に空より高い一雫の
暗く低い草熱れの縁にぼやけて消えれば
道は道で無くなった
そんな道も始めから道では無かったのか
と顧みる目も一雫の露に溶けたようでは
蹌踉けるようにも足を止められない先に
道は道の内へ内へと曲がり続け
けれども内へ内へばかりでは渦の形も現れず
穴を穿つようでも　溶けて土に浸み入るでも無く
渇く限りに渇いて色を失い　いや
何を望んで渇くのか　それだけは
灼けるように胸の奥へ　腹の底へ
穴を穿つように　溶けて浸み入るように
二〇二三年三月十四日

少しだけ
光りが明る過ぎるに違いない　その
少しだけの明るさに　この
眺めは隅隅まで　少しだけ色を失って
かにも　見て取れる何もが少しだけ
確かに色褪せてはいようけれど
失われているのは色とは違う　その
失われた何かのせいで　少しだけ
見て取れる何もが薄っすら鈍く輝いて
そのせいで　この眺めは隅隅まで
何処かしら古びて見える　それとも
古びてしか見えないせいで
少しだけ
光りが明る過ぎるかに目に映るだけか
いや　見て取れる何もかもが少しだけ
滑滑と角が取れ薄っすら鈍く煌めいて
確かに古びているに違いなくて　その

均しく色を消す燻んだ艶めきの奥から
古い時が滲んでは溢れ流れ出すようなら
その古い時に隅隅まで眺めは満たされ
その先の新しい時まで古びて行こうか
ならば
その古びた新しい時こそは
まだ誰も目にした事もない程に新しく
そんな時にどっぷり浸かって
眺めは隅隅まで　緩やかに溶けて行く
いや　溶けて行くかに光りが止まって
光りの奥の止まった儘の時が少しだけ透けて見えるなら
ここは　必ず辿り着けるなら辿り着かなければならない…
二〇二三年三月十五日

道が俄に脹らんで
足を止め見回すと

道が幾つも集まって来て溶けるように交わっている
時が幾つも集まって来て溶けるように交わっている
道と時とが　見える限り同じに重なって仕舞うのは
道も時も　ここを限りに道でも時でも無くなるから
にしろ
道は道　時は時
どちらもその脱け殻にしろ
その中に身を置いてさえ居れば
それより何が起こるでも無さそうで
その何が起こるでも無さそうな中で
溶けるように　それと交わっている
それは
手にも取れそうな渦の逆巻く水の塊のようで
その影を撫で廻してさえ居れば
疾っくに渦に巻き込まれた身は沈み掛けながら
水の向こうへ今にも抜けて出ようとしてそうで
にしろ
道は道　時は時

どちらもその脱け殻なので
水の塊のようなそれもその影も
同じに乾涸らびた脱け殻に違いなく
それより何が起こるでも無さそうで
その何が起こるでも無さそうな外で
固まるように　それに囲まれている
それは
手には届かない水の痕かな失われた時の痕で
二〇二三年三月十六日

水の痕は水の数だけ見付かる
（水の数とは？）
何かは知らないけれど
光りに晒される水の痕なら
水の嘗ての姿と幾らでも数え続けられる
けれど　そんな

数の痕だけが残るのかも知れない　そんな
数の痕を辿ろうと身を擦り付けようと
何を知れよう　幾ら痕を数えようと痕の数しか知れず
水の数さえ数えられないで
水の姿など知れる筈も無い
けれど　そうして
知れる筈も無い中に　何故かそうで有るしか無く
水の痕は水の数だけ見付かる
いや
（水の数とは？）
何かは知らないけれど
なんて嘯いて
知らない儘のそれを数え続けられるなんて
疾っくに行方を眩ました誰かの嘘話しでは　と
心に落ちれば　その誰かに成り済まし
水の数も　数えられる水の姿も
思う儘に語られようか　それとも
そんな語り（騙り？）こそ

数え切れない水の数を数えるかに
幾らでも語り（騙り）続けられ
そこに映る
姿の無い水の姿を有り有りと見せはしないか
な騙りに　それを騙りながらに騙されるのは
そんな水の姿を見たいと望むからに違いなく
二〇二三年三月十七日

何処もが色褪せ白んで行く
見回すと大きな窪みの真ん中で　ここはと
窪みの淡い翳りの上っ面を滑るように
すらすらと夢が思い出され動いて行く
（夢など　もうずっと見てないのにな）
と思う程に　夢は思い掛けず
色色に独りでに展べ広げられるようで
にしても概ね唯流れて消えて行く中に

一人の人の姿が
流れに逆らうように唯肌色を際立たせ
見てもない夢と同じに
見ず知らずな人に違いないのに
そんな人が　私に違いない
他の誰かでは有り得ない
と思えてならなくて
声を掛けようにも
その人が私で　他に私は居ないのなら
私はその人に声は掛けられないだろう
と思う程に　夢だからなのか
すらすらと色色と話しは弾み
酷く荒んだ在り来たりな話しなのに何故か
懐かしさに涙さえ流し合うのは　どうやら
どちらの私も少しも知らなかった隠し事が
互いの肌色の中に際立って明かされるようだからで
けれど　それは酷く見窄らしい汚れた隠し事で
すると　涙より先に声はすっかり夢に流れて消えて

すると　その人と私の体は手と足から一つに繫がって
ずっと　酷く黙る儘に
その人でも私でも無い
けれど　必ず見出されるしか無い唯一人の
その誰かが　こんな下らない夢を破り棄てるのが
唯一つの　何処にも居ない私の望みかに
二〇二三年三月二十七日

五月

終わった時の事をはっきり憶えて居るのは唯
水の暗い底より深くにまで届く
明るみより明るい静けさが
目の奥底に浸み込んで…

いや違う　抑も時が何を終わらせられよう
終わるばかりなような始まりだけが
繰り返し　そのどの繰り返しも一つ限りに
始まり已まないばかりなのでは
などと
考えられるのは誰？　いや
誰だって構わない
その人が（一人にしろ数知れないにしろ
直ぐ側に居て呼び掛けられるにしろ
明るみより明るい奥に匿われるにしろ）
残されたからには　残された限りには間違いの無い
明るみより明るい明るみなど暗い水の底へ沈めて唯
静けさを見分けるだけの目に映る明るみに翳される
重みより重い輝き
輝きであるなら輝きの終わりでも有ろう
な中で　時を計り　数え
終わった時の事を　その
始めから正しく狂い無く突き止め　身は

衰え頽れて行く静けさへ戻り続け　そうして
耐えるしか無い躊躇いを時から隠し守ろうと…
二〇二三年五月二十一日

影が倒れたせいで目が醒め
醒めたからには何としても
立ち上がらなければ　とは思ったに違いないが
嫌でもそれを思い留まって
その嫌を拭えない目で影が
どうなって居るのか　見て取ろうとしたろうか
そうであろうとなかろうと
疾っくに身は硬く伸び切り
険しい崖を攀じ登り　崖に負けず聳え立つかな
深く濃い影が真下へ引かれ
影を裏切れば望みは有ると
その影を励ますのか　その影に励まされるのか

二〇二三年五月二十二日

居なくなって仕舞った彼に就いて　何故か
その彼から怪しくも耳に馴染む話しを聞いて居るらしく
それは　彼が疾うに行き過ぎた
この怪しい眺めを具に見て取りながら
その行き果てる処に行き着く事でもあるらしく
けれど　そんなこの眺めも
孰れ時の支えを失い　虫の骸と同じに
朽ち果てて行くのも明らかでは
彼から聞ける話しなどすっかり戯言で
けれど　ふと
足元の土塊の乾いた煌めきに目を凝らし
その直ぐに燻んで仕舞う煌めきの燻みが
今この時の　その終わりまでを貫き通す
その揺るぎなさに狂い無く　身は揺さぶられれば

彼の戯言など無かったかのようで
けれど　そんな
彼の戯言が無かったなら
この眺めも始めから光りを失うのは明らかで
二〇二三年五月二十三日　戯言（たわごと）

何を思い浮かべたところで　それを
誰も知らなかったところで
思い浮かべられるものなど　高が
思い浮かべられるものでしかないのに
そんなものに　心は
のたうち回ったりもしよう
けれど　そうでもして居なければ　きっと
心は　心では居られない　そんな
心を　引っ掻いて　裸に剥いて　傷付ける
そんな事を面白がるのは誰だろう　けれど

そんな事に喜び勇んで励むせいで
心の静けさも取り戻されよう
などと顧みられる辺りに
思い浮かぶ筈の限りが思い沈む儘に躍るのは
誰が何を嘲笑うのだろう
二〇二三年五月二十四日

で何が望まれて仕舞うか
それを知ろうとする心の拙さからか
それに繋がる徴は　何時だって
降って湧いて来てように
それを巧く受け取れずに
有らぬ辺りに　独りでに
思い浮かばれる　例えば
喜びを極めるような
間違いなく望まれていた

それのそんな姿に搦め捕られ
搦め捕られる程に
喜びに痺れ傷付く心を躍らせ　そんな心の
まさか影なのか
にしろ　それは
ぐりぐりと燃えるように輝いて　それ切り
何の望みをも断ち切ってくれようか
二〇二三年五月二十五日　拙（つたな）さ

静けさだけが見付からない
けれど
そんな見付からない静けさこそが
何の喧しさをも無かったように消し去って
辺りを静まらせているようで
にしてもやはり愚かしげにも
何処もが凡ゆる喧しさで溢れ返り

見付からない儘な静けさを食い散らかしているようで
な事から目を逸らそうと目を逸らすと
逸らした筈の処へまた目は向くしか無さそうで
ならばと　確り踏ん張るかして
な処をその儘に置き去りにして
静けさばかりで溢れ返る
な静けさを次次に呑み干しては
やはり愚かしげにも
置き去りにした筈の喧しさを呼び戻しては引き裂いて
な裂け目に身を投げ溺れるように　後戻り出来ないまでに
静けさから遠ざかろうと試みるしかない
な処へと　歩み去れようか
二〇二三年五月二十六日

始めから有りもしなかった
なそれを探し求めて居たとは　などと

へたり込んだりしようなら　そんなそれは
そそり立つかに高高と目の前に現れる　なので
うっかり諦めたりは出来ない　いや
ならば却って　さっさと
うっかりもうっかりで無くも無く
弱弱しくも　へたり込む儘にも
有りもしない筈の間違いなく現れるそれの高みへとも
力強くも　駆け上って行くべきなのでは
他に途は無い
けれど　そうするのは
始めから有りもしなかった者として　か
それとも
そんな者をも踏み付けて行ける者として　か
けれど　踏み付けたところで
やはりこの身は　例えその先へ行くも有りもしない儘で
なのでこそ
他に途は無い
と　これは

諦めか　諦めへの諦めか
諦めを拒むしか無いと諦めて諦めを拒むか
二〇二三年五月二十七日

ゆっくり触れる　そうした儘に
それは　幾らゆっくり触っても
もっと幾らでもゆっくりと　触り続けられる　その
（水のように形が無いなら尚良い
それとも　そうして触り続けられては
何の形も失われて行くしか無さそうな）な
それにそうして触ってさえ居られるなら
それと距たる悉くは見せ掛けと知れる　例えば
間近の水さえ　どう姿を変え山を動かす程に暴れようと
それと距たる限りには何処までも見せ掛けに過ぎない
で　そんな
触り続ける程に　よりゆっくりな

その溢れて已まないかな　そのゆっくりな中に
浮くように沈むようにも
浮きもせず沈みもしないようにも
浸り切って　そんなこの身の身代わりに水に呑まれた
冷たい影を追うのか　それとも
な影を追う振りで　追える影などを戯れに拵えて
な影に寄り添い　歩くように泳いで行く
かにも
な影など淡く小さく消え掛ければ
共にそうして小さくなって　けれど
何処かで影とははぐれるしか無かろうなら
失せた影の　そのまた影に呑まれるように
な影の大きさ過ぎて透けるような暗さを味わい喜ぶように…
二〇二三年五月二十八日　触（さわ）れる

ほんの時時にしろ　時は止まる（らしい）

その
止まった時の中には　だから
ほんの時時なんて時も　無かろうね
と　な時時の外に身を沈めると（それとも投げ出すと）
空も海も酷く狭く
風も水も泥より薄汚れて見窄らしく
狭い空から　もっと狭い空が浮かび
狭い海から　もっと狭い海が深まり
もっと狭い　泥の凝り凝り溜まった
けれどその　泥の溜まりに映り込む
縮み果てた　空と海の裂け目の奥の
清かな暗み
で無いなら
何なのかな　なんて頭を捻る程に頭は喜びに満たされ
うっとりと

二〇二三年五月二十九日　凝（こご）り

見晴らせる限り遠く
こっそり遣って来た
平べったい隣の星へ
もう　そっと乗り移ってそうで　そこは
暗く
な暗さなど吹き飛ばし　酷く暑くて
な暑さも星は巡れば孰れは終わろうけれど
衰え知らずな儘に居座り色褪せ透き通って
暑さの終わりなどは望まれもせず忘れられ
暑い儘に暑さも忘れられ　けれどそうして
暑過ぎる時が長過ぎようと
何が絶えるでも失せるでも無く
凝っとそこに賑賑しく有るものは有る儘で
けれど
　そんなものらの後ろに
　それらよりずっと大きくても隠れて居られる
（大き過ぎては却って隠れて居るしか無いか）

暑さが色褪せるよりも　もっとずっと色褪せ
色など始めから無かったかに
暗い程に軽みを纏って明明と
隣の星の暑ささえ踏み拉いて　それは
暑さを見棄てて過ぎ行く　時の後ろ姿かなら
成る程心に落ちそうにも　けれど
絶えるように失せるように　掠れるしか無い
それは…
二〇二三年五月三十日

六月

男は私では無い
けれどそうして

離れて居る男を
凝っと見詰めれば見詰めただけ
男は全く私に違いない　それは
その離れて居て　それが
どうにもならないせいで
（全くそれは唯それだけのせいで）
男の窪んだ目の奥で溢れ
溢れる儘に男の体を巡る
冷たい血から更に冷たい血が溢れれば
血はもう私の体で造られてよう　そうして
私を私が男になるまで躍らせて
男と痛みを分け合い　男と私は
どちらも　その痛みの片割れになって
何時か違う二人で向き合うまでは何も起こらず
その何時かが　何処までも遠ざかる儘に古びるようなら
その遠ざかる程に知れに知れよう
男と私を離れ離れにさせている
必ず現れるに違いないそれは

待ち望まれも厭われもせず
男と私の間を
凝っと見詰めれば見詰めただけ
その酷く滑滑と狭まり窮まる間を
明るく冷たく行き来して已まないようで
二〇二三年六月十二日

ここでなら何だって片付けられて
なのでそれは思いの儘で嬉しくて
何時も遠くまで見通せて
けれど見通せ過ぎるのか
何時しか片付けられて仕舞ってるようで
いや　まだ確かな事は分からない
と　耳を澄ませば澄ます程に耳は
何だって片付けられて行く音を追うしか無く
そんなでは益益確かな事は分からなくなって

つまり先ずは
片付けてるのか片付けられてるのか
って事なんだけれど
そんな事じゃなくて
もっと違う事が見通せ過ぎてるようでもあって
そんな事が錐揉みたいにぐりぐり抉り回って
ここがここで有る事までも片付けられて行くようで
けれど　それならそれで
見通せ過ぎてる事も片付けられて仕舞ってようか
でも　まだ確かな事は分からない
なので　そんな分からない事を
また片付けに掛かるしか無いしても
こんな事をしてる姿は誰にも見られたくないし
いや　見せようったって見せようも無さそうで
それを良い事に嬉しい儘に
錐揉みみたいに回って行く…　疾っくにもう
片付けられるものなんて全て片付けて仕舞ったよ
なので　片付けられたりするもんか

なんて　何を抉ろうと空回りみたいな回り方で
二〇二三年六月十四日

終わりは終わりに追い越されて行く
追い越された終わりは終われない
のなら追い越されない儘に　それは
何の始まりなのか
いや　そんなのは始めから知られていよう
そんなのが　そんなで一つ残された　それだから
けれど　そんなそれよりも
それからの　それとも　それまでの
それから　と　それまで
の　どちらにも　どちらからも
追い越され　追い越した
始まりの始まれない　それは
いや

そんな　それ　なんて
それを　そうとも知れる筈は無かろう
で　そんな　それでも無く唯
追い越されもしない終わりなら
何を恐れよう　何に恐れられよう
そんな恐れだけに囚われて片付けられもせずに
二〇二三年六月十六日

恐れだけは有った
そんな恐れは失せ　それは
その失せ痕がすっかり変わる兆しなのか
動くより先に全ては頽れたかに
何の兆しも無い　そんな
兆しが兆す兆しも無かった　そんな
一つ限りの兆しが
兆す

のなら　それを
必ず何かに変えなければならない
直ぐ何かと換えなければならない
そう出来ているのかどうか
は　すっかり覗き極められ
けれど　湧き出すのは
涸れ果てた兆しの兆しばかりでは
何がとも知れず丸ごと削り取られるばかり
な　確かな眺めに
目に溢れる喜びを
波打つ勢いで送り出して行く
あぁ　これか
これ一つが兆していたんだ　と知れ
それ一つごと何の兆しも滑り墜ちて行く
その失せ痕すら無くに…
にしろ眼に溢れる喜びは
喜びなる限りには止め処も無かろう
二〇二三年六月十七日

予め示し合わせたのか黙って息を合わせるなら
鋼の刺し貫かれるかに概ね事は巧く運ぶにしろ
見知らぬ微笑みが鋼などぐにゃりと溶かしては
互いの間の暗いばかりな隙を断つように見詰め
な隙の暗く塞がるしか無い様を丸ごと呑み込み
それはそれを急いて互いの息の根を止めるのか
にも逃げ道はどちらを向いても容易く見付かり
ならばその場に勇んで斃れられようと心付いて
溢れる喜びを幾らでも迎えようと身を引き裂き
いや
な身などは激しく歩き回り続けて風に擦り切れ
血こそ熱く巡り逸ろうが疾っくに冷たくなって
けれどそうして消えられるでも無いなら無いで
そんな身だけに纏われるたっぷりな鋼を探しに
徒に風を切り身を虐げる喜びに心は震え高ぶり

もう出来ない事など何も無いのなら鋼も要らず
そうして終わるしか無い眺めだけが繰り返され
刺し貫かれても行くけれど　それを
刺し貫くのも　それならそれで　それは
二〇二三年六月十八日

望んでもないのに知らず真ん中に来て仕舞うのは
真ん中と隅っこが何より速く絶えず入れ替わって
隅っこには人で無しとか身を固めて潜んでそうで
な隅っこに自ずと背を向ければ
もう必ず真ん中に居る事になる　けれどそれは
人で無しとかも必ず真ん中に易易と入り込んで
真ん中を思いの儘に引き裂いているのも確かで
な確かさで真ん中を見失わずに居られるにしろ
却ってそれで私は真ん中の中に溶けて居るしか
無いようなら　人で無しは

溶けた私を蜜のように黙って吸い続けてようか
いや　な事では真ん中は真ん中でも何でも無い
な真ん中でも何でも無い真ん中に閉じ込められ
吸われる蜜の中に蜜を吸う人で無しの姿を映し
何をしているのだろうか私は　などと嘯いては
そんな私の姿を捜し当てては　それを
人で無しの姿に入れ替えては　引き裂いている
二〇二三年六月二十八日

働くような遊ぶような　その
どちらでも無いような　そんな
どちらでも無いように　まるで
そうなるように何時も　心を砕いているのか
そんなでは誰も係わろうとしないし
誰とも係わろうとしたくはないらしいのなら
傷付ける

それとも
予め　匂いも痛みもなく　さらりと
傷付けられ　傷の匂いと痛みの中に浸されて
息をする　の
何が息かも　知らされず
けれどその　知らされず　こそ酷く捻くれて
知らされず　を嫌でも知らされ尽くされては
知らされる　などよりずっと知らされ過ぎて
知らされ過ぎてはもう何を知ろうとも出来ず
傷付ける
それとも
予め　匂いも痛みもなく　さらりと
傷付けられ　傷の匂いも痛みも凝り固まって
息を殺す　の
何が息かは　殺せるからには知れ過ぎて
けれどその　知れ過ぎて　こそ酷く楽しくて
あぁ　楽しい後には何も起こらない　なので
傷付ける

それとも
息が切れれば　殺す　だけが
甘い夢を終わらせて　遊ぶように働くように
二〇二三年六月三十日

七月

憶えているさ　けれど何を
そうさ　その　けれど何を
こそ　憶えている証しだろ
そうして憶えているだけが　その
何を憶えているか少しも言えずに
憶えている儘に　居座って
そうだ　居座るなら居座る為の

そんな帰る処　それとも
訪ねて行かなければならない処　そんな
どちらか知れない　なので彷徨い巡るしかない
そんな処が何処かなんて　まるで憶えてなくて
けれど　そんなそこを
そんなそこと分かったのが何時なのかは
まるでそれが唯一つの事のように　憶えている
からには
その何時のその時は　丸裸に剥かれて　けれど
そんな丸裸に敵う何も無いのは　それこそ
憶えている証しに違いなく　けれどその
証しを証しに来る奴の　あざとく狡賢い
何故なら　そんな証しなんて
憶えているさ　けれど何を　の
その何を　を絞め殺しに懸かるのは
何時もの事と来ては
二〇二三年七月七日

逃げ回るからには追われていようけれど
追われる為に逃げ回っているか　それとも
逃げ回る為に追われていなければならないか
どれがどれとも　くるくる回して回ってそうで
そんな事なのかどうかさえ　まるであやふやでは
そんなあやふやを抜け出すには陰に隠れるしか無い
陰
けれど何が何の陰なんだろう
こっちからはそっちが陰で
そっちからはまた
その陰になってる　どっちかが陰では
隠れられる陰なんて有るのかな
なんて事を考えて仕舞うのは　きっと
絶えず向きを変えては動き回ってなくちゃいけないからで
そんなでは
陰に逃げ回られるばかりに違いない　それって

陰
を　私が　追い回してる
けれどそれは間違いなく
陰の陰に隠れてる陰から
私は逃げ回らなくちゃいけないからで
で
触れた
その　触れられたのは何だろう
二〇二三年七月八日

陰の暗さが朝の空に映り
その暗さが拡がり
その暗さに押し倒されそうで踏ん張るにしろ
その暗さにもう額を侵されていて
その額の獣のような見窄らしさを
陰の暗さに激しく投げ返さなければならない

そう思い至れたなら　疾っくにそうしている
筈だ
けど朝の空が暗過ぎて巧く確かめられない
ならば　そんな事は忘れて仕舞って構わない
そんな事よりも　何処へ戻れば良いかだろう
朝の空が暗過ぎるのはきっと崖を登り切って
その先に朝の暗い空が重そうに塞がるからで
その朝の空に狭い額がぴたりと嵌まるようで
額と同じ広さの空は石のように硬くて脆くて
あぁそんな事を分かるならもう先は無かろう
そう思い至れたなら　疾っくに穴でも掘るか
穴とはまるで違う何かに額を緊く突っ込んで
その額の獣のような見窄らしさを
陰の暗さに幾度となく激しく投げ返している
筈だ
けれど陰の暗さが重くて巧く確かめられない
ならば　そんな事は忘れて仕舞って構わない
そんな事よりも　誰が戻ろうとしているかで

だってそんな誰かの事など誰が憶えて居よう
と　独りそれを憶えている私と
獣の額のように狭い穴とが
陰の暗さに阻まれて
遠く隔たる
二〇二三年七月九日

先へ先へと先の先を確かめようとしている
愚かな事だ
愚かな事しか楽しめない
それが愚かかどうかも確かめられない
先へ先への先の先を確かめようがないからだ
そうして　きっとその
確かめようもなさの　その始まりも
確かめようがないからだ
いや　これは嘘だ

楽しくないので直ぐに分かる
始まりを確かめようのないものが
仮に有ったとしよう
既にそれは死んでいる
愚かな事だ
愚かな事など楽しめない
けれど　それを
楽しめないと分かれば　死ぬ程死ぬまで楽しめよう
嘘だからだ
いや　これは嘘だ
と嘯いたりも出来るからだ　そして
ずっとそうして来た　その始まりを
確かめようはないからだ
そうして
先の先は何時までも死なずに続いて行くなら
屍だけが　それを追って行けようか
屍は楽しい
愚かさの尽きないからには

と嘯いたりも出来るのは
屍など　疾っくに持ち去られた後だからに違いない
二〇二三年七月十日

艶艶と濃い髪が逆立ち振り乱され
静かに重く淡く伸し掛かって来る　さも遠巻きに
顔は見える筈なのに陰そっくりで　いや
陰よりずっと深く虚ろで冷たくて
逆さに伏せられた底無しの穴が覆い被さるようで
あぁ　これは向きを違えているんだ
とか　小さな息のように呟けたか　すると
びっしり絡み合い風に激しく靡いて煽られる髪は
どれもが髪と同じに　か細い炎で
そうか　髪が数え切れない炎の集まりなら
これはきっと　髪でも炎でも無いだろうな　と
逆さを逆さに　穴の底でも覗き込んだか　それとも

呑み込まれるように　覗き込まされたか　なら
これもきっと　呑み込まれたでも覗き込まされたでも無い
そんな事で　そんなものに　のべつ語り掛けられている
その
びっしり絡み合い風に激しく靡いて煽られる声は
どれもが声と同じに　か細い炎で
そうか　声が数え切れない炎の集まりなら
これはきっと　声でも炎でも無いだろうな　と
けれど
そんなものがそんなものをのべつ呑み込み合って
それで穴など疾っくにすっかり窒がれては
声でも炎でも無い　そんなそれに
のべつ耳を傾け胸を焼き焦がされるしかなかろう　と
逆さを逆さの逆さに　穴の底の裏でも見上げたか
吐き出すように吐き出されるように
穴など知らない　向きなど違えようもない　で
笑いが込み上げるのである
のである　のである　と傷が傷を傷付け合って

そんな傷らは重なり合い爆ぜるかに積み上がり
艶艶と髪か炎かに逆立ち振り乱され
髪でも炎でも声でも傷でも無くなって行く
けれど　そんなのは
そう焦がれているだけで叶わぬ望みだろうな　と
遠巻きの淡い陰に冷たく包まれ匿われるのか
もうそれで
呑み込まれも　吐き出されもせず
二〇二三年七月十一日　窒（ふさ）がれ

で
何から逃げてるのか」「
それが分かる位なら逃げたりしない」「
分かってるじゃないか　それだよ」「
それからは逃げられない」「
それはそうだ　だから逃げるしか無いのさ　だって

逃げられるのなら態態逃げるまでも無いしな」「
で」「なんて事もない」「
で」「
では無いんだから　そう遣って
でには逃げ込めない　お生憎様。
でに逃げ込めないので逃げるしか無いんだが」「なら何で
で何から逃げてるのか　だなんて
でを抛り込んで来るのかな
でなんてお前の言う通り　無いんだから
でで始まる話しも要らない筈だ」「
で」「そうか　俺を有りもしない
でに引っ張り込みたいんだな　それだけだろ」「違う違う
でをお前が欲しがってるみたいだから
でなんて無いって教えてやろうと思ったのさ」「嘘吐け　なら
でで始まる話しは出来ない筈だ」「そうさ　出来ない話しを
でで始めたのさ　これは有りもしない
でにしか出来ない事だ」「

で」「無い
でで始めなければ　それから逃げてるそれを
でに惑わされて　それとも知れなかったろう　その先に
での無い処から
でへ行き着こうと　お前は逃げるしかないのさ」「違う　無い
でへなら幾らでも逃げ込めるぞ」「そう　態態
でへ逃げるまでも無しにな　そんな
ででしか無いし　そんな　無い
での中にしか逃げられず　なので逃げるしか無いのさ」「
でこんな話しになるって訳か　そうか　お前
でだろ違うか」「
で」「なら　お前を取り除けば済む話しだ」「ハハハ　そしたら
ではお前だったって事が分かるだろうよ　そしたら確かに
でからは逃げ切れるよな」「
で」「
での無い処へ戻るだけさ　だって
でなんて無くて　なので
でだった訳で」「ふん　まやかしだな

で　が無いなら
で　の無い処へも戻れずに…」「な事を言うなら
で　なんて　また言うなよ　言える筈ないんだよ」「
で

二〇二三年七月十二日

女にしろ男にしろ独り残されては生きられない
などと言ったところで　生きられないなりに
消えて無くなるまでは　その残された処で
独り　そうして生きて仕舞うのも確かで
では　それを
独りに残して去って行ったもう一人の独りは
何処へ行って仕舞っただろう　いや
何処かには居て何食わぬ顔で生きては居ようか
けれど　生きて居ようが居まいが
先に消えて無くなって仕舞ったのも確かで

となると
生きられない事に為るか
消えて無くなる事に為るか
二つに一つと言う事に為るか
それとも
残して去ったか　残された儘に居るかに
どちらも　独りは独りなのだから
どれ程の違いも無いのかも知れない
けれど　こんな事を考えられるのも
独り残された儘に居るからで
消えて無くなっては　考える事も出来ない
（と言うのは言い過ぎで）何処かへ
消えて無くなっては　それで何を考えられたところで
その考えも　何処かへ消えて無くなるしかない
（と言うべきだろう）だとすると
生きられる生きられない　などは
（生きられたところで誰もが直に生きられなくなるなら）
全く取るに足らない事で

何処かへ行って仕舞わない事
先に消えて仕舞わない事
独りな儘にも残されている事
こんな事だけが　唯一つの何事かに為るのだろう　いや
そう言ってみたところで　それを自ら選び取れる訳ではない
それは　そうであるしか無いだけの事だ
そうであるしか無いだけの事！　これだけが残る
ここに行き着くしか無いのなら
こんな事を考えて何を考えた事になるのだろう
二〇二三年七月十三日

その体は寝た事が無い　そうして
何時も立っているのは　何時か
空が張り裂けるのを待っているからで　それは
昼の空とも夜の空とも　その境目の空とも違う
そんな空に大水が溢れ　空はぐにゃりと破れる

それは全く確かな事で
独り立ち尽くす儘なら
他の悉くは横たえられ
昼の空でも夜の空でも
そんな空に大水と共に
それ一つ切り
大水で張り裂けた空に
ぐにゃりと重い鋭い影を
その影が消え果てない限
その影が消え果てれば水
そしたら体の深い裂け目
ゆるゆる窒がって
窒がる切り窒がる空と危
秤のように体は酷く細か
それらは空の重みを詳し
空に重みは無かったと分
けれどそう分かれば立ち
だってそれで自らの重み

そのぐにゃりに圧され
独り体は引き裂かれる
水に混ざり流れ転げて
その境目の空とも違う
空に抛られ粉粉だろう

裂かれた体はその儘に
落とし延ばして行こう
り空は切り裂かれ続け
は忽ち涸れ空は窒がる
も縫い合わされるかに

うくゆらゆら繋がって
く刺刺しく揺れるなら
く測っていようけれど
かるだけかも知れない
っぱなしの効も有った
ばかりに体は支えられ

水無しの底の泥の底の深い眠りへ落ちられよう
にしろ秤は秤そんな眠りさえ棘棘と詳しく測り
測られた眠りの重みはぐにゃりと鋭い影に尖り
昼も夜もその境目の眠りも切り裂いて行こうか
ならそれをどう窒げよう　そんな
裂け目の事など忘れては　そんな
裂け目ばかりが残るよう
二〇二三年七月十四日　効（かい）

知らない事は無かった（その無かった事の他に）
隅から隅まで知り尽くせずには居られなかった
危うさに戦きながら　いや　な戦きを踏み越え
知り尽くし切った戦きを危ぶみながら
そんなそこからは逃れようは無い　と言うより
そこへ逃れ窮まったなら
知らない事の無くなるしかないのは明らかでは

と　しかし幾らか某かの疑いが兆すなら兆すで
それも知り尽くされ切った内へ空かさず呑まれ
で　後は無い　あぁ
後が無い筈など無かろうに
知らない事が無い筈ならば
そんな事さえ知れなかったとは　とは言え
な事に窮まるしか無いのも確かと言うなら確かで
（確かで無い事を言えないなら　確かの確かも虚しいが）
いや
後が無いなら　先なら有る　の
何が先かを知りには行ける　と言うより
そうするしかないだろうか　それとも
そこでまた幾らか某かの疑いが兆すなら兆すで
な疑いこそが　有るなら有る先を引き寄せよう
けれど　そんな有る先に何が有ろう　な
何が有ろう　だけが知れもせず
な事で　先へ先へと暴かれる様なら知れる
それを　知れるとはまるで異なる事とも知れる

な事は　逃れ窮まる　を逆様にしただけに違いない
にしろ　な逆様には逆様だけの遣り方が有るのも確かで
にしろ　な遣り方に付いて行けず取り残されても居るようで
な事を　先へ先へと何を暴けも出来ないで先の先なら有ろうかと
二〇二三年七月十七日

力には限りが有る　その事は力に
始めから備わっていて変わらない　つまり
限りが有る限り　それは
何であろうと　力である　なので例えば
力が無いせいで願いは叶わなかった　と言うのは
喩えでしかない
何であろうと　必ず力は有る
力が無いなら　それは何かでさえ無い
裏を返すなら　それが何かでさえ無いなら
始めから　その力には限りは無い　いや

限りが無いなら　それは力でも無かろう
限り有る力が　そんなそれに叶わないのは
限りない力に　ではなく　力で無い事に
従うしかないからだろう　けれどこれも
喩えでしかない
何であろうと　必ず力は有る
力が無いなら　それは何かでさえ無い
何かでさえ無くて　どうして
限り有る力を従えさせる事が出来よう
それは必ず
限り有る力を従えさせる何かなのであり
その為には　力である限り限り有る力が
用いられるしか無い　けれどこれも
喩えでしかない
と言うのも　抑もが力が喩えなのである　何の？
恐らくは
限りが有る　と　限りが無い　の間を架け渡す何か
な何かのお蔭で

限りが有る　も　限りが無い　も
そんな儘な事で　喩えにしかならない何か　に
纏わり付いて離れずに居られる　けれどこれも
喩えでしかない
喩えにしかならない何か　からして
喩えなのだから　けれどこれは
喩えでは無い　少なくとも
喩えでは無い　と言い募る事は出来よう　もう
喩えも尽きて　それに何も言い返せないからには
二〇二三年七月十八日

時は常に先を行く
後に何が残ろうと顧みない
きっと時は時を嫌いで
時に触れられたものなど汚くて
もう触れたくもなく

ひたすら時の先へ行きたいらしい
確かに時から逃れようなどと企てるとしたら
時自らの他には無さそうだが
自らは自らからは逃れられない　なので
時は常に先を行く　いや
こんなのは見せ掛けに過ぎない　それとも
こちらが見誤っているに過ぎない（
時は壊すばかりで　何も時を壊せないせいで　か）
時は常に買い被られている
それを引っ剥がして時を眺め直せば
時は酷く弱弱しく見窄らしく　いや
そんなのこそ見せ掛けに違いない
弱弱しく見窄らしく見えるのは唯
時が酷く狭い中に囚われ身動きも取れないからで
小さな穴が一つだけ時が息をする為にか開けられ
その穴を覗き込めば時の姿を見て取れる　いや
真っ暗な中に何か艶めかしく　ゆらゆらと
揺れるらしい小さな息の根の震えるだけで

けれどそれはそうでもして置かなければ
必ず時は時で無い悉くを狂わせ…
で　こんな話しが何の奴に立とう
少なくとも時は稼げよう　稼げたからには
そんな時を　虚しく易易と費やせよう
そうこうする内に囚われの時は息の根を腐らせながら
じわじわと潰えて行こう
しかしこれは　時が時を喩えたに過ぎない
こんな喩えが　誰の何の役に立とう
二〇二三年七月十九日

何にでも嘴を容れる　そんな
大きな嘴だけを残して逝ったのは確かな
嘴を無くして探し回る（嘴を無くせば　すっかり
顔を削り取られたような）人で無しが口を開く「
始めばかりで直ぐに途絶えて仕舞う

な事を　な事から追い回され何時も為てたけれど
な事で　どうして逝けたのだろう
始めばかりで直ぐに途絶えては
何時まで経っても終わりは来ない筈…
始めにしても直ぐに途絶えるのなら
それでもう始めは始めでも無かろう
ならばそこには始めから終わりしか無かろうか
な処で　追い回されるように
直ぐに途絶える始めを始めでも無くに始めては
直ぐに途絶えさせる…
な事を　繰り返していたとは　けれど
な処で　直ぐに途絶えるにしろ何を始められよう
な始めに　ならない始めだけを縁（よすが）に
どう遣って死ぬまで生き延びられよう…
それとも唯　始めからの終わりに追い回され
孰れは遂に終わりへの終わりに囚われるしかない
な事だったとすると
始めばかりで直ぐに途絶えて仕舞う　だなんて

酷い思い込みで　そのせいで…」な事を言う口に
人で無しは呑まれたか
にしろ　口は閉ざされるでも無く「見ろよ
と　また
始めばかりで直ぐに途絶えて仕舞うなら
始めばかりで直ぐに途絶えて仕舞う　これだけが
唯一つ確かな事で（なので変わらず繰り返される）
他の悉くこそ酷い思い違いで…」な事を真顔で言う口を
呑み込める戯けた嘴を無くしては　どうしよう
二〇二三年七月二十日

時は生け捕りにされ穢らわしく零落れていた
けれど時は　この世の凡ゆる形の影を従えて
影に囲まれた真ん中で触れてはならないかに
恭しく敬われても居た
零落れるとは　そんな事だ

そんな事なら　出来ない事などもう何も無い
いや　出来ない事なんて無いに決まってよう
ここへ来れば　もう当たり前に死に物狂いで
疲れ知らずに　何にだって思い通り立ち回り
いや　一つだけどうしても出来ない事が有る

それは

動き回るのを已めようにも已められない事で
ぶっ倒れるまで動き回り目を覚ませば直ぐに
膝が笑おうが　足首が燃えるように痛もうが
爆ぜるように　動かしっ放しの体は止まらず
一日が終わる時の中へ溶けるのを待つばかり
時が時へ溶けるとは！　でまた日は継がれる
零落れるとは　そんな事だ
けれど
彼と来たら　この世の凡ゆる形の影に叛いて
影は失せたその外でも影に手酷く切り裂かれ
狂うような輝きを放ちながらも却ってそれで
蔑まれ蔑ろにされて居る
零落れも出来ず　終わる一日からも弾かれて

二〇二三年七月二十一日　零落（おちぶ）れ

言葉を使う奴が一人残らず出来損ないなのは
言葉のせいではなく　元元
言葉を使おうとしない奴らがずっと黙る儘で
そのせいで
一人残らず出来損ないだったからなのに
そう認めたくないばかりに　いそいそと
言葉に濡れ衣を着せ　己を出来損ないから
救い出そうと　虚しい企みが繰り返される
さて
これは言葉による罠で　然も
明らかに罠と分かる罠で　なので却って
誰もが容易く嵌まる罠で
その狙いもまた明らかで
何でも言葉のせいにされる事で　言葉は

無くてはならなくなる訳で　でなければ
言葉など疾っくに棄てられていた
なので
出来損ないで居るのが嫌なら
黙った儘で
出来損ないから抜け出すしか無い
でもどう遣って？　などと声を上げてはもう
それで　黙った儘では無い訳で
話しにならない　そんな
話しにならない声を並べ立てようと
何を始めた事にもならない　これが
言葉による罠が巧く造られているところで　で
どいつも出来損ないで居るしか無く
言葉に負けを認めたような事になって仕舞うが
これも罠の内なら
この罠は言葉による罠にしろ　仕掛けたのは
言葉ではない
言葉もまた仕掛けられた罠に嵌まって

罠の為に使われている　なら
誰がこの罠を仕掛けたのか　と声を上げようか
けれど赤児が泣き喚くのと然して変わらず　それは
黙りも出来ない出来損ないの幼さを晒すだけで
二〇二三年七月二十二日

そう言えば何故だろう
彼は何時も黙っている
彼が何事かを語るなど
有ってはならないかで
凍り付いた波頭の向こうへ毀れて消えた
新しく造られたばかりの靴のような形の
舟それとも
かのように崩れて失せた彼の　波打って
踊る目をした自らから逃げたいだけの問いの
幼さそれとも

幼さにもならない　何故なら
問いにもならない問いへの問いでは　問いは
自らから逃げ回るばかりだろうから
あの毀れて消えた舟って何だっけ？
とか　逃げ回る問いから逃れようと試みても
凍り付いた波頭だけが嗤うように楽しそうに
けしかけるように　彼に黙る儘を強いるよう
変わらなくちゃいけないよ　さぁ歌いなさい
だなんて声は疾っくに靴のように履き潰され
毀れて消える美しさこそ言葉を凍り付かせる
な事を今更に考え直してみたところで新しい
舟それとも　唯
身を削りたくて諸刃のような水面を滑って行くばかりな
彼の常に横を向こうと心懸けて唯黙る儘にも
尖った額と小さな耳と酷く重そうな顎の先の
粉粉に砕けて崩れて消え失せて行きそうにも
有ってはならないかに軽やかに酷く朗らかな
な程に幼さを際立たせて行く　いや違うだろ

黙る儘の彼に　こんな戯言こそ毀れて消えて
舟だの靴だの幼さだの何の喩えにも使えずに　けれど
尖って小さくて酷く重そうなのは揺るがない　けれど
頑なに揺るがないなら居処など何処にもない
何処もが揺らぐ中から独り礫のように弾かれ　けれど
黙る儘なら黙る中に彼のようには彼で彼は居られようか
二〇二三年七月二十三日

小さ過ぎる私の　何故
小さ過ぎるかを　考える
（考える　なんて獣の暇潰しだが
いや　構わないさ獣で）　すると
これは　血の流れを考えないとなと
考えを進めたばかりにか　道に迷った
それとも
道に迷った　と考えなければ何だか

血の川へでも溺れて流されてそうで　けれど
道だなんて禍禍しい処を歩ける筈も無い
小さ過ぎる脚を突っ立てて震えてるだけ　と
うっかりとも　な要らない私の姿が知れると
な姿に順って　道の真上を道に導かれる儘に
するすると進んで居ようけれど　こんなのは
道に迷うよりも酷い様を晒してるに違いなく
血の川へでも溺れて流されてそうで　にしろ
血の川なら何だか粘粘と重そうで楽しそうで何故
小さ過ぎるかが　そんな事で分かったようでもう
獣の暇潰しも要らないか　あぁそれは大き過ぎるよ
何が大き過ぎるのか　頭もくらくらと知れない程に

けれど
頭なんて直ぐに直る　だってやっぱり頭なんて
大き過ぎるに比べれば小さ過ぎで血の川に比べれば
小さく固まる血の石ころがほんの一つ切り　けれど
な石ころは血の川を転げる内に　ざらざらと溶けて
血の川を丸ごと独り占め出来たみたいに脹れに脹れ
いや待てよ　血の川は何処から遣って来たんだろう

血だなんて　小さ過ぎる身を巡る管の中を細細と
詰まり詰まり喘ぐように固まり掛けては淀み滞り　それとも
ずっと詰まった切り石のように荒荒しく固まって
小さ過ぎる私を
一つ切りに　前へ前へ狭く緊く圧し拡げてないか
（拡げられる訳ないよ）
あぁ　な事では
小さ過ぎる私の　何故
小さ過ぎるかを考える　なんてまるで身の丈に合わなくて
道に迷ってだけは居られる　と考えなければ何だか
血の涸れた川へでも溺れて流されてそうでは（ならばせめて
血塗れの石ころ一つ切りの私の姿でも浮き浮きと思い浮かべ
獣のように涸れた川に浮かぶ振りでも楽しもう
でもどう遣って）を考える
そしたらきっと震えて突っ立つ力なら　そっと湧いて来よう
二〇二三年七月二十六日

血に溺れていた
血にしか溺れられない
溺れたければ浴びる程
血を呑み続け血に酔うしかない　それも
すっかり昼の内に呑める限りの血を
呑み尽くさなければならなくて
そしたら陽が落ちる頃には
血の一雫どころか匂いすら激しく拒み厭う
僅かな陽にも背いて唯暗いだけの小山が
川の流れより低い辺りに浮かび上がり
その脹れても平たい影の塊のような
血の他も何の匂いをも撥ね退ける
な姿な儘にそれは皮の直ぐ下の
血の管が青く沈み込むような
淀み濁る考えを透かし見せ
振り返ると森の拡がりはどんな獣の血をも吸い取る形で
二〇二三年七月二十七日

促すように　で促すのと違う事をするように
遠い誰かが「昼」または「夜」と言っていた
すると身は微かに温められ　けれど却って
眺めは冷たく動きを止め　な事では
眺めは何処までも同じに続いて行く　ここは
目を瞑り耳を欹てるしかないな　と
ずっと待っていたらしい
埋もれた儘の何処まで大きいか知れない石が
端から僅かずつ削られている音が微かに届く
いやそれは全く音では無いし石とも違う事だ
に違いないと思う程に　それは全く石の音で
石の中を響いて　音は音と違う事をしていて
その音を隠らせ　石は石と違う事をしていて
遠い誰かが「昼」または「夜」と言っていた
その事に違いないと思いたいけれど思えずに

けれど
それは

促されるように促されるのと違う事のように
目にも耳にも捉えられず横たわって来るのは
死に続ける事のように繰り返される森の中で
（または森の外でと誰が言おうと聞きそびれ）
ずっと待っていたらしい
埋もれた儘の大きさを測る事も要らない塊が
（なのでそれは少しも塊でないとも知れるが）
もうすっかり冷めたらしい私の身を覗き込む
いやそれは全く身とも違うし私とも違う事だ
に違いないと思う程に　私と塊は入れ替わり同じに
私とも身とも違うと塊でないとも入れ替わり
な入れ替わりも　それと違う事に入れ替わりけれど
森だけは死に続ける事のように森な儘なのは
遠い誰かが「昼」または「夜」と言っていた
その時にもう決められていた事らしいにしろ
森の中にしか現れない事が覗き込まれるなら
その覗き込まれる事を覗き込み返すのは何からと
見付かる筈もないと諦めて森の外を探してると

森が探すのでないなら森は森な儘では居ない
二〇二三年七月二十八日

行方を眩ますには
行方を眩ませる先に必ず辿り着ける
丸丸と深く脹れて丸みを絶えず蝕まれている
穴
が
隠されているのを知っていなければならない
それとも唯　知れるだけの事を何か
知ってさえいれば良いのかも知れない
穴など要らない　それとも
穴とは隠され窒がれている行き止まり
なだけの事で唯　のめり込むように
窒がれている行き止まりへ辿り着く為にもう
穴へ逃げる蛇を追うように　身は常に傾いで

黙れば黙る程開かれて行く　切り分けられるように
捲れるように開かれて行く
有りもしない穴を包み込みたいかに
なら有りもしない儘に
穴は必ず有ると身は潜むかに愈愈励んで更には
開かれる限りに切り分けられるなら分けられ過ぎて
くるりと裏まで細く丸く尖り回ろうか　錐のように
隠れる遠い穴にも狙いは定まっているかに　けれど
開かれ過ぎた細い身は丸ごとそっくり傷そのもので
切り分けられた肉と骨を剥き出しの傷ばかりな身が
何を纏えよう　何を纏える筈も無かろうとも
先ずはふと墜ちても行けよう穴でも目指すしかなく
行方を眩ますには
行方を眩ませる先に必ず辿り着ける
深深と丸く抉れ骨と肉を絶えず蝕まれている
穴
が
隠されているのを知っていなければならない

血などは静かに抜かれ

二〇二三年七月二十九日

つまりは石とはそっくり血で　いや
こんな事は黙っているべきだ　と
真っ先に黙ったのは石と血で
それに倣うべきなのだが
石でも血でもない身には
それは叶わなくて
石を響かせる音などに　うっかり耳を傾けてしまう
血はそっと行方を眩ます　けれど
そうなるしかないのなら　そうなるしかない
そんな成り行きを　引っ繰り返せる身である筈も無く
（耳の底に荒ぶる血の微かな囁きなど紛れ込んだところで）
石が石であるだけの　なので石にはもう後がなく
何時石で居られなくなるか知れない

な処へ続く狭く真っ直ぐ過ぎて一足ごとに見失われ
一足の過ぎ去る度に見出される
歩けるからには道には違いなかろう　けれど
先へ先へと吸い取られて行くだけで　蛇のように
拗るばかりな細い足では身は火照って引き摺られ
血が失われてはそんな事かと直ぐに心付くにしろ
やはり血の囁きを知る耳に凭り掛かるべきなのか
な耳の底な筈なのに　先回りされたかに　そこに
上を向いた乾いた石が少しだけ脹れて剥き出され
血を求めるかに　この身が墜ちて頭が割れるのを
凝っと黙って待ち侘びているようで
そうか　それも良いかもな
そしたら割れた頭の中から
尖ったような丸く捩れるような耳の中が飛び出し
耳の底にぴたり埋まる石も真っ二つに割られよう
例えその割れ目の奥に石の音が響くだけにしても
そんな処で石が独り石の儘で居られよう筈はなく
丸丸と血をたっぷり蓄えた獣共が素速く入り込み

石の音を追い回し食い潰して行くようなら　もう
血は還って来られようか
な匂いならするようでも
石が石で無いなら　それは血でも無い
傍らに転がる耳の中だけは独りそれを知っているにしろ
こんな事は黙っているべきだ
二〇二三年七月三十日

八月

なけなしの時を燃やされてるんだね　これは
と
誰かに言われた　のでなければならない
急ぎ　殆ど四つん這いになって

な自らに　静かに穏やかに呆れながらも
誰かを負うように　な
誰かなど居ない　のでなければならない
呆れて仕舞うのは　そうして
のさばり返る
のでなければならない　の事だけのようなら
のでなければならない　は直ぐ様あやふやに
まさか　命に係わる成り行きかとも
全く危うくて　危ういのでなければならない　へ
殆ど四つん這いになって　それともうっかり
後ろ脚を曲げ　つんのめったりしないように
足元を穿り返すか　で無いなら
なけなしの時　それともそんな時に擬えられた
何か重いものを抱え込まされて　それを
独りで燃やさなければならない　のならそれは
誰かなど居ない　のでなければならない
な筈は無い　集き騒ぐ他の誰か共の　ふと
狂い誇るように静かに穏やかに

こっそり森の奥深くかで音も無く
なけなしの時を燃やし尽くそうとするらしい
にしては　我が物顔に一人切りに歩み去った　そんな
もう誰も居ないそこで　燃やす
のでなければならない　それを
独りで燃やさなければならないか　な私の
いや違う　　な
いや違う　　な私に
何のなけなしの時など残されて居よう
二〇二三年八月二日　穿（ほじく）り

失われても消えない
暗い炎のように遠くに小さく
揺れる音の親しさ
そんな遠くにも微かに音を聞ける
その淡く温かい距たりの懐かしさ

なので黙る儘に　静かに穏やかに
な音へは　辿り着けないと分かりながらも
それを励みかに前へは進めよう　と言うか
な音へと　ずっと向かって行くしかない
と　喉などごくりと鳴らしてなかったか
ゆっくり口に含み舌でたっぷり転がし
それを味わい尽くし一呑みにしたくて
けれど何を？　音は何時しか
ぼやけて崩れ　遠いも近いもあやふやに脹れ
脹れる儘にも　また崩れるなら溶けて流れて
そんな流れに　足を掬われそうでは
そんなそれに　一呑みにされるのは　まさか
この身なのか　あぁ　それで
その淡く温かい距たりの懐かしさへと
この身ごと包み取られたいと望んでる
失われても消えない
暗い炎のように遠くに小さく
二〇二三年八月三日　親（ちか）しさ

沼に青い陽が差し巴の姿に光る　それを
振り返って見付けられたようなら
光る巴は幾つか緊く重ねられ　けれど巴はずれて拡がって行く
それをやっと抱き抱えていて　その
懈い重さを抛り出したいなら　それを
では無く　この身こそ
沼へ投げ出し　青い陽をばらばらに砕くべきで　そしたら
青い陽は透き通った空をも飛び過ぎて行き　それでも
巴は巴の儘かは知れないにしろ
懈い重さは翼でも生やしたかに軽やかに　いや
その翼こそ巴に負けず燃えるように光り盛(さか)り
懈い重さなどまるで無かったかに　酷く重い重過ぎる
にしろ　その重さは身投げと引き換えに得られたなら
それをずっと抱き抱えているべきで　いや
何処もそんな奴らで溢れ返って居た筈だ

互いが互いを夢見るかに　その愚かしい
夢を道端に零し零し数を幾らでも殖やし
なので
沼に青い陽が差し巴の姿に光る　それを
振り返って見付けられたようなら　その
照り返しの向こうに暈けて翳む
この身を夢見る私　それとも
私を夢見るこの身　その
私は誰かで　この身は誰かの身のようなら
そのどちらでも有るに決まってる　そんな
更に向こうで人混みに揉まれて待っている
巴の姿に光るのは　命な限りな命
かとも
それと親しく交わろうとする程に
逸れて行くのは
私がこの身からか
この身が私からか　その
どちらかなんて新しい夢に委ねるしか無いかに

青い陽を溜め込んで懈く重そうに遠ざかるかな
沼にしか知れないようで
二〇二三年八月四日

膝を折り　背負っている
拡げられた翼が酷く重いのなら
身に食い込み肉を裂き骨を砕く
筈が痛みも無いのは　どうやら
翼の重みは翼ばかりに掛かって
翼に食い込み肉を裂き骨を砕く
らしい　けれど
らしいだけで翼の形は変わらない
らしい
のは何故　きっと
らしい
のせいだ　翼にしても翼

らしいだけで　その
らしい
が変わらないなら何も変わらない　その
翼の翼らしさを翼そっくりに
使い回すなら空も飛べようけれど　そんな
らしい翼は　その
らしい　の他は何の働きも拒む
らしく　きっとそんな事で酷く重い
らしい　と
らしい　の翼が拡がるよとは戯れ言かにも　そんな
らしい　が酷く重過ぎるのかも知れず　その背負う
らしい　の重みから　膝を折りながらも翼を生やし
それでやっと身を躱している
らしい
のなら　翼の形はその儘に翼の重みは
翼に食い込み肉を裂き骨を砕く　これだけは
らしい　で済む筈はない
らしい　と翼は果てなく

らしい　に貫かれて行くのなら
二〇二三年八月五日

禿げ山を焼く火は嘘のように速かった
夜通し見上げていた
燃えてはいけない山
なだらかな頂は切り拓かれ墓がびっしり並ぶ
その山が焼かれるのは何故か
身も赤く染まり考え続けた
考えただけ火が熱く迫って
考えるのを直ぐに已めるべきだとは思っても
頭は激しく働き続けた
それから‥
が　思い出せない　換わりに
思い出されるのは山の森の恐ろしい深さで
じっとりと冷え切って　火すら拒むだろう

切り拓かれる筈もない　墓も有る筈はない
その
どちらかが思い違いだ
二つを瞼の裏に映してみると
どちらもが一息で消えそうで　慌てて
消える前に一呑みにしたのか
二つの眺めが入り混じって腹の中に収まって
やけに重いようで擽ったいように軽いような　にしろ
それはもう取り返しも付かず全く一つの事とは分かる
けれど
そんな事は分かって仕舞ってはいけなかった　そして
取り返しが付かないのは　この先の事に違いない　と
身構える程に身は二つに分かれて行くしかないらしい
いや違う　目を瞠れ　身は一つ限りだぞ
二つに分かれたどちらかを行くしかなく
必ずどちらかを強いられ逃げられない筈
これは全くどうにも一つだけの事なんだ
それから…

は　失われた切り
と
これは上辺だけ見れば墓に入る奴と入らない奴の話し
でも済みそうだが墓など取るに足らない事だとすると
どちらかを強いられるのは何の事だろう
二〇二三年八月六日

周りを　あれこれの
寝息が　迫って来る
眠くて　眠って目を醒まし
幾らか　昼は更けたのなら
これを　繰り返して行くしかない
なのに　時は仄かに遡ってようか
にしろ　昼は深く根を張るようで　なら
時など　心に懸ける程の事なのか
けれど　周りの寝息は時を測るか

それを　知りたくて耳を欹てれば
眠くて　眠って目を醒ましたって
更けた　筈の昼は潮が引くように
確かに　何処へか戻りたそうでは
周りを　あれこれの
寝息が　迫って来て
遠くで　時は腐り暮れるも明けるも朽ちて行く　なら
そんな　昼を外れた時なるなど思い出しようもなく
これを　繰り返して行くしかないのこれとは何
などと　そっと昼を突き放す振りをしてみよう
すると　少し疲れたかに昼は僅かに更けるかも
これを　繰り返して行くしかない
なのに　時は仄かに遡ってようね
だって　更けたら更けたで昼はまた同じ昼へ戻れるらしく
またも　時は腐るに任され昼独りだけは熟れて行くようで
二〇二三年八月七日

真下へ火は刺さったか
そんな火なら真っ直ぐこちらへ向かおうか　深いにしろ
青空は火と比べ軽過ぎて酷く余所余所しい
けれど火はそんな空よりもっと遠く冷たく
傍らで火影かの仄明るく淡く揺れるようなら　迫り来る
間近の火を逃れ　火影を頼って何処へか逃れられようか
な望みも
忽ちに火は絶ち切り悉くを燃やし果たそうに
ならば火影は何処へか消える幻にしろ幻な儘
海なら火を拒もう中へとそっと進んで沈んで
そんなら火影に包まれ守られ海へと降りて行く
私なら火に包まれる私を火は赦すか赦さぬか
な事は火を楽しく映す波間にさえ知らぬ事で
真下へ火は確かに刺さっては狂い無く舞って
静かに火影を追うように海を光りで覆ったか
そんな火は何処まで映って走れば尽きようか
などと火を眺めるのは私で無いなら誰なのか

夜には火影はそっと陸へ上がり私で無いなら
誰をか火の痕へ戻ってゆらゆらと探し回ろう
私なら火の燻る山坂を遠く冷たい幻と見上げ
傍らに火影の仄かに面白く映るのと戯れよう
二〇二三年八月九日

赤児を呑む牛
牛を呑む赤児
赤児を呑む牛を呑む赤児を呑む
のは
石
それとも
森
石を呑む森
森を呑む石
石を呑む森を呑む石を呑む

のは
あなたですよ　違いますか
違います　と　自ら進んで答えたらしいならそれは
私
なら私は必ず私が呑まなければならないものを呑む　そんな
それを呑む私
私を呑むそれ
それを呑む私を呑むそれを呑む
のは
晩い昼
それとも
夜の抜け穴
晩い昼を呑む夜の抜け穴
夜の抜け穴を呑む晩い昼
晩い昼を呑む夜の抜け穴を呑む晩い昼を呑む
のは
牛ですよ　違いますか
違います　なんて誰に答えられますか

二〇二三年八月十二日

足が求められていた
額ずき頬擦りし憐れみを乞い涙出来る
なのに
蛇は疾く消されたか運び去られている
何故
だなんて
うっかり蛇の失われた辺りを覗き込むのは　さてどうなのか
覗き込んでも覗き込んでも何も無いその
覗き込んだ奥のずっと遠い底で
嘗て足に踏まれて居ただろう蛇共が身を捩らせ身を寄せ合い
一塊の波打つ影のように塵塗れで絡み合い…
ま　それは奴らの何時もの事で奴らの好きにさせれば善いが
奴らの他に何も無いなら　この覗き込まれている深さは何か
しかも深い程にその深さは　身を捩らせずには居られない程

見窄らしい　そんな
見窄らしさに拗らずには居られないこの身も
身を拗らせずには居られない程　見窄らしい
いや　分かってるよ
足が求められていた　全てそのせいだってね
けれど　そんな
足に何を求めたって何も返って来ない　なら
一塊の塵塗れの蛇共の処まで深みを伝い降り
いや　分かってたよ　そんなの出来ないって　なので
足が求められている　全てそのせいかどうか　なんて
身を拗らせられるのに比べたら何の事でも無かろうね
そんなで
見窄らしさが見窄らしさを引っ繰り返せたら　何時か
覗き込むしかなかった深みも蛇共が埋め尽くしてよう
二〇二三年八月十三日

色には色が無く形には形が無い
なら
色の外に色は有ろうか
形の外に形は有ろうか　けれど
外には外が無いだろう
内には内が無いように
なら
ここはここに無い
などと言ったところで虚しい限りで
な事なら
私はまたは彼が　彼または私に向かって
未だ色を見た事は無い　とか
未だ形を見た事は無い　とか言ってから
でも
海の色も形も知ってるよ
空の色も形も知ってるよ　と続けて
ここに無いここが　如何に狂い無く
ここと知られるか　それを

私または彼に分からせるべきにしろ
私には私が無く彼には彼が無い
なら
私に彼が有るか彼に私が有るか　けれど
有るには有るが無く無いには無いが無い
無いが無い無いなら有るばかりなようでも
その有るが無いのだから無いが無い無いも無い
な事より
海も空も真っ暗な穴に墜ちたか疾っくに忘れられ
ここはここに無いここへ狂い無く墜ちるしかない
なら
色には色が無く形には形が無い　な事もまた無く
その無い為だけに
（諸諸無い為には諸諸有るのでなければならず）
無い色には色が有り無い形には形は有る
とはまた　何て見え透いた嘘
けれど　嘘には嘘が無く嘘が無いのも無い
な事で

狂い無く墜ちるだけなここはここと証され証されない
な　ここの　狂い無く確かな確かで無さしか無いなら
な　狂い無さは独り狂い無く
な　狂い無さの高笑いは常に響いて響かない
二〇二三年八月十四日

一足ごとに足元に
拾えるものが溢れ
拾えるからには何でも拾って目も呉れず
喉の奥に抛り込む　少し大きなものなら
捩込む　もっと大きいのなら
限り限り身を　一つの穴のように開けて
一息に勢い込めて　呑み込む
そうしていれば
後にも先にも何も残らないだろう（か）
そんな眺めが薄ぼんやりとも見えて来る

その
何も残らない眺めの中に　この身は残る
それは拾っては抛り込み捩込み呑み込む
けれどそうして　何のこの身が残ろうか
身こそ予め失われていたのではないのか
失われた身では殆ど何も溜め込めなくて
抛り込み捩込み呑み込んだ筈のものらは
失われた身の傍らに転がるでも無いなら
何処か遠く隔たった　にしろ
常に近くに寄り添う　そんな
何処へか運ばれるに違いない
な
彼は何者なのか（彼とは？
抑も何処から何処までが彼なのか）
な考えが頭を掠めれば　私は
彼に拾われ何処へか運ばれるらしい小石一つで
その中身は　唯（彼とは？）だけで
せめて果ての知れない彼の吐いた血の一雫でも

（彼とは？）の内へ流れ込んで欲しいと願って
それを巡らせようとコロコロ転がる身ではありそうで
二〇二三年八月十五日

私に係わらない悉くを取り除けた処で死にたい
生きようとして仕舞うのはその他の事では無い
そんな処へ行き着けたなら直ぐに死ねるけれど
そんな処へ行こうにも
目眩く諸諸に妨げられ
死ぬに死ねないので何が何でも生きようとする
しか無い
これは神の話しである
とも言い切れない
寧ろ
神を乗り越えたそれともうっかり行き過ぎた
その先の話しかも知れない

だとすると
神とは高高目眩く諸諸の内の一つなのである
唯高高にしろ唯一つ高高と掲げられる
そんな軽い形（なり）をしていて
それが神を他と距てている
それだけの事なら
神を乗り越えたそれともうっかり行き過ぎた
などと言うのは全く中身の無い話しで
それだけの事で無い事が神に有るかどうかを
能く能く見届けなければならない
という話しになる　で
神を貶める事程容易い事は無いにしろ却って
神を貶める事から逃れるのは中中に難しい
それはきっと神が　軽い形（なり）をしながらも
目眩く諸諸に深く根を降ろしているからで
そんな神だから　人を生かして仕舞う
うかうかと人はそんな神のせいで生かされて仕舞う
しか無い

とすると神は常に次のように言っている事になる
「お前が神を貶めたいなら死んでからにしろよ！」
これが神の全て　が言い過ぎなら
これが神が人に仕掛けた神という仕掛け　で
生きながらにして
ここから逃れるには獣にでもなるしか無いけれど
彼らも生きる事から中中逃れられずに居るのなら
きっと獣も獣の神に獣の神を仕掛けられていよう
人の神から獣の神に乗り換える
これは賭けるに価するか
二〇二三年八月十七日

弾き出されたか擲たれたか　もう
彼は　ずっと先へ距たる儘に居る
しかし　距たるとは何か　その距たりとは何か
測れるでも無く（測れるのは唯

距たりの上に延ばされる物差しの長さに過ぎず
幾ら狂いの無い物差しを拵え繋げ並べたところで
距たりは距たりな儘唯のっぺりと延びて距たる）
で　彼に追い付けるでも彼から離されるでも無い
彼の姿など影も無い　抑も
彼とは誰なのか
距たっているそれを彼と呼ぶ他になくて
それだけの事で彼は唯彼なら　その距たりが
その儘に彼なのか　つまり始めに距たりが有って
その距たりとは何かを知れなくて
彼はその距たりなそこに呼び出されたに過ぎない
つまり弾き出されたか擲たれたのは
距たりそのものでなら
距たりとの距たりが距たりであるしか無かろう
確かに　そんな距たりでは測りようも無かろう
けれど　私はそれを掌の上でか
コロコロ転がしていないだろうか　掌で無いのなら
額でも舌でも腹の上でも構わない　それともそれを

常に見失わずに居られるなら（いや見失いようもない）
私と幾らか距たった辺りに転がして置いても構わない
などと言うのは全て嘘だ
しかし　何処までが嘘か
距たりに至るまでかそれとも　距たりから嘘なのか
しかし　嘘なら嘘で構わない
嘘をコロコロ転がすだけならそれより何も起こらない
嘘だったところで距たりは距たりな儘だろう
嘘の距たりなら嘘の物差しで測れも出来よう戯れに
しかし　嘘とは何だろう
もし嘘が　その儘に距たりなら嘘など何の事でもない
それとも　私からして嘘だったらどうだろう
彼は距たりと何の係わりも無く独り彼で居られよう
ひょっとして　私の変わらない望みとはそんな事か
けれど　私を嘘だと確かめるにはどうしよう
それを妨げるのが始めの距たりだとしたら　そんな
距たりを彼と呼ぶ私は彼に苛まれるばかりなようで
二〇二三年八月十八日

私は…（思いも寄らなかった事だが）
私は…と始めるしか無かった　それは
追い詰められ　凡ゆる逃げ道を塞がれた
行き成り何かそんな事が後戻り出来ずに
起こったのでしか無かった　それだけが
私は…
なのだから
私は…が　私は…の中身を探っても
その起こった事が起こり続けている中を
私は…が為す術無く唯巻き込まれて
けれど　そんな　私は…　なので
私は…　は　私は…　を守る事も出来る
なので　私は…　は
私は…　に寄り縋り獅噛み付き凭り掛かって居られる限り
私は…　な形（なり）で居られるらしく

けれど　その他の目に映る全ての眺めは
私は…　などと言うものを全く認めない
なので
私は…　（思いも寄らなかった事だが）
私は…　と始めるしか無かった　それは
追い詰められ　凡ゆる逃げ道を塞がれた
行き成り何かそんな事が後戻り出来ずに
起こったのでしか無かった　それだけが
私は…
なのだから　その
繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り
返し
さて　そんな事で　私は…　も擦り切れて行くに違いない
けれど
擦り切れ果てるまでは擦り切れ続けるしか無いのも確かで
けれど
にしろ　私は…　はそれで却って研ぎ澄まされて居ないか
そうして唯

私は：　とも言えないそれとも言う事も要らない　そんな
それに：　私は：　は擦り換わって　そんな
それが　私は：　を探しに　さて
何処へ　向かおう　そこにはきっと　私は：　の影も無い
な事が　それに擦り換えられた　私は：　の微かな望みか
望みにもならないか　な処へ出て行けたとして
そこで　私は：　が　私は：　に出会える事も無いのなら
つまり　望みにしてもそれがそれを望んだだけの望みなら
私は：　を　私は：　へ追い詰めたのは　そんな
それの　望みの望んだ儘の事だったのかも知れない
けれど　そんなそれも　私は：　と共に消えるのも明らかなら
それは　影も無い私は：　の為に　私と擦り換えられるだけの
私は：　の裏面のような姿にも見えて来　いや
な姿は　何処の誰の前にも現れようもないなら
な姿が　な姿を疾っくに影も無いも無いも無い
私は：　の内に埋め込もうとでもするか（けれど何の為に）
私は：　は　そんな事は望みもせず知りもしない
ならば　何の姿ももう要る筈は無い

そんな　眺めだけが残ったとしても　あの
私は…　は　何処かでまた繰り返されようか　その
繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り
返し
さて　そんな事なら　残った眺めも擦り切れて行くに違いない
けれど　な
けれど　がその儘に　私は…　に為れたら（でもどう遣って？）
私は…　影も無くでも無く　それに擦り換えられるでも無くに
私は…　な儘に研ぎ澄まされもせず幾らかは閉じて行けるかも
そっと　目を瞑ろうと試みるように
私は…　もそれも無く　起こった事が起こり続けている中でも
二〇二三年八月二十日

眺め渡すしか無い限り　忘れられたのはきっと　私は…
な事だったに違いない　それとも
な事とは少しも係わらない　なので

私は：　など始めから無かったかに
忘れられた事にされているだけ
なのかも知れないけれど知れないけれどの先は
失われたらしい何かを改めて失い直すばかりで
何を取り戻せるのでもなく　で
眺め渡すしか無い限りな儘を眺め渡すしか無く
凝っと　ぁあ
凝っと　って何？
凝っと　の中には　私は：　が必ず混じってそうで　な
私は：　へ　凝っと目を凝らそうとしてるだけなのでは
けれど　な
私は：　にしても毀れて見る見る小さく砕けて行く
そんな　私は：　が　私は：　の中に
私は：　を探しても　見付かるのは空っぽなような
空っぽ　とさえ知れない
けれど　恐ろしく熱く忙しく動きを止められながら
盛んに　動き続ける凍る心かで　いやそんな喩えも
私は：　と同じに毀れて見る見る小さく砕けて行き

私は……　はもうそんな事の何処かへ失われて行って
私は……　とそれでそれらしき何かを言おうとしても
黙るしか無い　黙って
眺め渡すしか無い限りな儘を眺め渡すしか無いのか
とさえ　黙る儘では問い掛けるのさえ儘ならずに唯
……
の中に　どれ程の事が有るのだろうとぼんやり時を
見遣る
そうだ　時だ
時ならあの時に疾っくに止まった筈だろうに何故
その同じ時は今も止まらずに続いて行くか
私は……などと言えて　ついそれに寄り縋ったのは
時が同じ時の儘に続くのに惑わされていたに過ぎず
止まった筈の時がその儘に止まり続けていたのなら
唯その事が起こり続ける他の何もが失われただろう
なのに　また
……
の中に　どれ程の事が有るのだろうとぼんやり時を

見遣る　儘に何もかもが計り知れず動いて已まない
そんな　動いて已まない中から時が撥ね飛ばされる
そうだ　それこそ間違いなくあの止まり続ける時だ
ずっと　求める程に予め失われ続ける
なので　忘れようにも忘れようの無い
二〇二三年八月二十一日

止まらない時の閉ざされた中へ抛り込まれる
止まらない時の閉ざされた中へ抛り込まれる　これは
必ず間違っている　抑も時は
止まったりもしないし止まらなかったりもしない
止まったりもしないし止まらなかったりもしない　のなら
時など何の事でも無い　そうだ
時など何の事でも無い
この世で唯一つ何の事でも無いのが時で
約めて言えば時など無いと定まっている

のなら時の事など死ぬまで忘れた儘だし
死ねばそれで何を忘れるも何もなかろう　なので
必ず間違っている
こんな事を考える事全てが必ず間違っている
あぁ　その全てって何だ
きっと酷く小っちゃく見窄らしく衰え果てた
な事で　それは
時にとことん痛め付けられたからに違いない
もう何の事でも無くなっているのなら
必ず　間違っているの
必ず　も　間違っている　も
必ず間違っている
とさえも　言える筈もない　のなら
時独りが　必ず間違っている　をさえ捩伏せ従えるかに
時を行き成り止め切った時が止まらずに時を止め続けるな
ぶつ切りな姿を自らぶつ切りに繋ぎ回す姿で荒ぶり果てな
果てを継ぐのは　またも
時独りで　必ず間違っている　をさえ捩伏せ従えるかに

止まらない時の閉ざされた中へ抛り込もうとされるのは
何？
必ず　も　間違っている　も
必ず間違っている
と言おうとして言い損ない続けるなら　な
言い損ないの声になるかならないかの
境目だけは途切れさせず　その境目に
身一つを擲って　その儘に狂い無く象って
時を行き成り止め　切った時が止まらずに時を止め続ける　な
時に混ざり込んで　時を時で無くせば
時など何の事でも無い　そうだ
時など何の事でも無い　と
何の事でも無い時を時の儘に時の向こうへ消し去って
その痕に疵一つ無い全てのぬるぬるぬると剥き出される　な
眺めに独り酔い痴れ尽きて
時よりもっと何の事でも無い　な
それ　でしか無いなら　そっと驕るかに
時の消えた向こうの眺めさえ引き寄せようとするか

二〇二三年八月二十二日

に
何も変わらないし何とも換えられない儘に
身一つだけが　欠けて歪な輪を転げさせる
かに僅かずつ拉がれ　それともそんな事は
少しもそんな事では無く
何も変わらないし何とも換えられない儘に
時の重しの中に砕かれてはぐるりと回って
身一つに戻って身を歪な輪に身構えさせる
かに僅かずつ拉がれ　それともそんな身は
少しもそんな身では無く
いや
…では無く　が違う
いや
…では無く　が違おうが違わなかろうが　つまり

：では無く　が　：では無く　なら　：では無く
で有るしか無いにしろ　そんな　：では無く　を
前触れなく　：では無く　では有り得なくさせる
何もかもが　変わって
：では無く　を他の何かと換えて仕舞う事が常に
起こり続け　な事が繰り返され　な事では
何も変わらないし何とも換えられない儘に
身一つだけが　欠けて歪な輪を転げさせる
かに僅かずつ拉がれ　それともそんな身は
少しもそんな身では無く
いや
：では無く　が違う
全くそんな身でしか無く狂い無く象られ　な
狂い無さに縛られるなら狂うしか無いか　な
狂いさえ疾っくに先取りされて残るのは　な
事とは全く違う　しかし
全く違うからには　その裏付けとして
全く同じ事が繰り返されなければならない

その繰り返されを　身一つで引き受けなければ
身一つも失われるな
何も変わらないし何とも換えられない儘に
身一つだけが欠けて歪な輪を転げさせる
かに僅かずつ拉がれ
二〇二三年八月二十三日

拉がれ拉がれ続ける身を　見限れば　その
見限る身も拉がれ続ける　それも
見限れば　な愚かさと争い　な争いを見限り
な身限りをそっくり他の姿をした身と換えても
見限られたより更に強く見限るしか無い争いと　また
愚かさの限りを擦り付けられるかに
争い直すしか無い　けれど
愚かさの限りを擦り付けられるかに　な事を
愚かさの限りに擦り付けられる覚えなど有る筈も無い

なら無いで
喘ぐ　とは必ず違うなら
えあぐ　えがう　らえぐ　えらう　ならその
えらう　とも必ず違おう　えらぐ　にして置こう
な　必ず喘ぐと違う　喘ぎようで　ならきっと
な　喘ぎようは恣で
けれど　恣に振舞えるのは時しか無い　余所余所しい時
に　恣に　恣な姿に象られた喘ぎようは　敢えなく拉がれ
な　拉がれる身の他に身に纏える端切れの端も取り去られ
と　取り去られって何が？　と見回すと
取り去られたのは全く　取り去られた限りの争うしか無い
にしろ　取り戻す為では無く　取り去られた限りの限りを
争う限りに争うしか無いのは　全く明らかな限りの明らかで
そうか！　そうだな　けれど何が明らかなのか　それを
まるで知れないのが明らかなら　な
明らかに優るものも無かろうか　な
明らかが争いに止めを刺すなら
刺すで　何が何を刺すかもまるで知れない訳で　それを

何に換えようと換えた事にも為らず　な事に
拉がれ続ける身を捧げられないのも明らかで　な
明らかから逃れようも無いなら　争いなど
始めに見限られた儘に棄てられ　争い独りが争いと争い
余所余所しい時にでも　恣に弄ばれてよう厭われながら
二〇二三年八月二十四日　擦（なす）り

火が穢れを持ち込んだ癖に
火は穢れを
火に照らされるものに押し付ける　な
火の明るさに晒されるなら　それは必ず
晒されてはならない裂け目で　なので
晒されないならそれは裂け目では無く　それは
裂け目なら必ず晒されてはならない
にしろ　火は
その明るみを酷く平らかに拡げて仕舞ったからは

火の穢れを逃れられるものは無い　なら
裂け目で無いものは無く　必ず
それら悉くは晒されてはならない　なので
悉くは晒されてはならない裂け目の晒される姿で
いや　これで済むならこれだけの事かも知れない
互いに晒してはならない裂け目を晒し合い　なら
裂け目と裂け目は繋がり合うかな姿で
穢れと穢れもそんな事なら　唯至る処
穢れで占められ　それより他には何も起こらない
けれどそれが少しもそうでないからは
それをそうでなくさせる何かが隠されている筈で
それは
火の事なのか
火を盗み独り占めしてる奴の事なのか　それとも
必ず盗まれるのが火なら
火と火を盗む奴の事なのか　それとも
火を盗まれるように仕組んだ奴の事か　それとも
もっと他の違う事なのかも知れない　抑も

火とは何だろう
火とは唯穢れまたは穢れを持ち込むもの　ならば
穢れとは何だろう　唯至る処
穢れで占められ　それより他には何も起こらない
のは　そうであるにしろ
その穢れの中で　有りと凡ゆる事が起こるのなら
悉くが晒されてはならない裂け目の晒される姿で
それに拠って
それだけで済まない事が起こり続けるのは　全く
どれ程耐え難い事も穢れの事であるより他に無い「
抑もお前がそっくり穢れで出来上がってるんだよ」とでも
穢れか火が穢れを持ち込むように仕組んだ奴に言われたら
晒されてはならない裂け目の晒される儘な姿を晒されても
黙って　な身を　穢れの中に混ぜ込んででも行くしか無い
にしろ　これが何の答えに為らないのも明らかなのも全て
穢れのせいなのだとしか言えない…
としか言えないからと言ってそれは少しも何なのでも無く
二〇二三年八月二十五日

な
火は真ん中で裂け真ん中から開け開かれる
のでは無く…
ので有ろうと
火が真ん中で裂き真ん中から開け開かせる
そうして裂け　開け開かれるのは
そうして裂け　開け開かれるしか無い
その儘にその通りな
そんなそれ自らを欺く為のそれ自らと凝っと向き合って
裂け　開け開かれ
それが　そんなそれで無くなって行く　にも
その儘にその通りな　それ　で
そんなそれが果たして　それでも
裂け　開け開かれ
ているのか　どうなのか

などと言う問いは必ず
それがそれを欺く為で　な
欺きに凭り掛かれるなら　な欺きこそ
火の真ん中をぐるりとも引き回せようけれど
で　火を裂き　開け開けたところで　きっと
火が火を欺く　その始めからな欺きのせいで
火は火な儘に有るしか無い　と知れるだけか
な先には先が裂け　開け開かれる先に
火は真ん中で裂け　火を避けられないそれを
火が真ん中で裂き
二〇二三年八月二十六日

裂けた先が　とは
開け開かれた開け開かれが
その儘に火　なのか　なのでは無いのか
な事ももう　取り返せない　と

な事の痕を　燃え滓のように見棄て
それともそれを見棄てる眼差しから見棄てられ
心を逸らす　けれど
裂けた先も開け開かれた開け開かれも失せては
心を逸らせる向きなど無くて　な
向きの無さの何も見当たらない底の辺りか　に
燃え滓にさえ為れなかった　心
とそれを呼べるかどうかも覚束ない
いや　覚束ないならないで構わない
な事より　何故それを心と呼ぼうとして
いや　心と呼ぼうとも出来ないならそれも構わない
けれどそれに換わる何かを持ち込んでみたところで
何も変えられないのも予め失われた心かに明らかで
けれど　な処にまでも火は必ず先回りしていように
火の姿の影も無い換わりに唯失われた心の明るみか
それとも　な儘にも失われた心の明るみとは異なる
な事なら　それをその儘に火と呼ぶしか無かろうか
な処へか　いや

な処とも異なり
なら始めからその呼ばれた通りに火と呼んで置けば
唯それだけの
それだけが　途切れようの無い火の儘に燃え始めて
な火の姿の影も無いのと同じに
失われた心の底もその痕もなく燃やされ続けている
な事なら　な事の　な処とも異なる
開け開かれた開け開かれにまた戻るしか無いような
けれどもう何が裂かれるも裂かれる何も無さそうな
唯それだけの
それだけが　穢れ…
二〇二三年八月二十七日

穢れでしか無い
火への懼れ
が盛（さか）れば

火そっくりに噴き上がる
火を厭う様を振り立てるしか無い
けれど徒に逃げ場を失った姿を晒しているだけ
と分かって仕舞えば
火が飛び込んで来る　火で充たされる　火とは何か
火なんて知らない　火なんて無かった　で
穢れだけは残るか残らないかを
嫌でも探り見なければ居られないのが
火なのか穢れなのか　だってそのどちらかしか無い
なら
火なのか穢れなのか　なんてどちらでも構わなくて
どちらでも無くなる　で
火の穢れだけが残るのを静かに受け容れる他に無く
火の穢れに渋渋馴染んで行くにしても
火の穢れは厭われる限りに厭われ　な
限りが限りを食い荒らし呑み込むなら
火の穢れさえ残らない痕が要らない儘
抛り出されたように見窄らしく残って

火の穢れを追い詰め引き剥がして行く
にしろ
な痕は　要らない儘で　いや
な痕しか無いなら　要るも要らないも無かろうかに
な痕は　何処へか頽れ去って　そうして
な痕を　引き剥がしたかな痕には痕も無かろうかに
穢れでしか無い
火への懼れ
の兆しが　弛く弱い限りに滲み上るか浸み下る　な
揺らぎの
火の穢れに似て　穢れを脱ぎ棄て裸に剥かれた
火の姿に吸い込まれそうなら
火への懼れの兆しにゆるゆると抗って
火の姿を抜かりなく砕いて行くのは誰
二〇二三年八月二十八日

火は忘れた　誰が…　も無く
火も　誰が…　きっと一つの事の内（
うんざりする程に狂い無く）
とどうやら見えて仕舞ったらしく　なら
な　らしい事の外から外が押し寄せて来る
にしろ　その外は
火も誰が…も一つの事の内　の外では無く
だって
火は忘れられ　誰が…　も無いなら
そうで有るしか無い
そうで有るしか無い？　何が…
の　何が…　が行き成り襲い掛かって来る
その外なら外の　それとも
な　外より外かも知れない
な　外など疾っくにまるで外では無かろう
な処から　荒荒しいまでに見窄らしく
酷くそれだけな儘にそれ限りな　何が…
な姿で

な姿で？　何が：（かな
同じ事が繰り返されるのか　な
繰り返しは直に空回りして途切れ）
な何が：は　な姿で　だけに磨り潰され
にも　な姿は　そっくり
火は忘れた　誰が：　も無く
へ戻るしか無くにも見失われようか　な
兆しなのか　な兆しも無しに
知らず
な事らを溶かし込んだか　全て棄て去ったか
な　平らかに低く拡がる剥き出しの
外も　外の外も拒む　内に限られる外なら外が
ゆっくりと傾いでは揺らぎ已む
時を止めたかな静けさを引き裂くのも　火で
な火を抑え込む何も無いのなら
二〇二三年八月二十九日

外が疾っくに外では無いなら
火も疾っくに火では無かろう
それは　もっと冷え冷えとして厚ぼったく
何の動きも呑み尽くし殆ど身動ぎもせずに
余所余所しく行き成り間近に横たわるかに
上辺だけは酷く穢れ　穢れる程に穏やかに
そんなそれがそれである為に
その為で無い悉くを戯け拒み
いや
そんなそれにしろそれもまた火の為り換わりに違いない
のはそれを映す
疾っくに外で無い外の内に点されたかな
戯ける様も火にそっくりな穢れな儘な姿が
映される姿では引き剥がしようも無くに
思う様そこならそこに伸び上がり浸み拡がり
かにも
外で無い外の内が嘘だったかに掻き消されれば

掻き消したそれこそ　火の為り換わり
にしろ　敢えなく
火も　映される火の姿さえも　跡形も無ければ
もう　火を幻とさえも追えず火は絶えたなら
火の為り換わりの換わりに置き換わるのは何？
そんな何？　も追える筈も無くにも　それでも
それは　それかとも知れようも無いにしろ
火のように掻き消えない限りは　それは
それがそれで有る為に
その為で無い悉くを戯け拒むか拒まないか
いや
それがそれの為にそんな問いに囚われる謂われも無いなら
それならそれがそこならそこに残ろうが消えようが
何の事でも無いけれど
何の事でも無い　儘かに
何一つ変わらず変わる兆しも無いなら
その変わらない中に追い立てられ続けるしか無い　それを
火でも火の為り換わりの事でも無いと知れただけでも

火に苛まれるしか無い身一つは
身一つを置き残した儘にも
身一つに自らを抛り棄てられたようで
二〇二三年八月三十日

火が除かれた穴なら明るくも暗い
火が尽き果てた痕なら暗くも明るい
な
明るいと暗いの薄暈けた戯れに為り換わるのは
それらしい為り換わりの現れを望んで
な現れそうな辺りを覗いて傾ぐ身一つとは
距たる限りに距てられた　けれど
距てられ過ぎれば何にでも為り換われるなら
恐ろしく間近にも行き成り現れよう
裂け目　いや…
裂け目の姿は疾っくに削り取られたか溶けて流れたか　な

なら　裂け目の奥の　にしろやはり裂け目には変わりない
けれどそれでは何が裂けたか見えず何も裂けてないも同じ
であろうと　取り返しようもなく塞ぐも綴じるも為らない
その有る儘に裂け目の奥を晒すしかない裂け目では
裂けるより前から　始めから裂け目だった　な
裂け目でも無いかも知れない裂け目だけが
そこへと悉くが溶けて呑まれたかに　その儘に
渦を巻くでも無し（見えない渦なら巻いてようか）唯
次への為り換わりを待つでも無しに待ってようか
にしろ
悉くを溶かし込んだなら重過ぎて
何へ為り換われるも無さそうなら煮詰まり煮えたぎり
その裂け目を覗き込む独り取り残された身一つを
軽い限りに　けれど軽い程に
覗き込まれた重過ぎる限りを独りで担うしか無いなら
重いと軽いは幾らでも為り換われようか　な
中へ溶けて呑まれるのを待ちたくも無く待つばかりか
二〇二三年八月三十一日

九月

裂け目など　目を裂く程に何処までも見続けたところで
無い
裂け目の姿はどれもまやかしで
裂け目の姿を切り除いて現れる裂け目の奥もまやかしで
何故ならそれは例えば時が予め裂け目だからではないか
時が動くなら裂け目の上を動くだけ
時が止まるなら裂け目の上で止まるだけ
時が動きも止まりもしないなら
裂け目の上で動きも止まりもしないだけ
いや
動きも止まりもしない時はもう時かもあやふやで　なら

裂け目が裂け目かもあやふやで　な
あやふやだけが残れば　あやふやの中にまた
裂け目か裂け目の奥などが覗き込まれようか　にしろ
な事から何が始まるでも無く　動きも止まりもしない
時など　身を切り刻む程に何処まで追い続けたところで
無い
始めから喩えでしか無かった時が無いなど何でも無いが
その　時に為り換われる喩えが接がれて行かないのでは
動きも止まりもしないでも居られずに　逃げ場も無く
切り刻まれて行く身の震える姿などが
裂け目の奥かに浮き浮きと覗き込まれたりもしようか　な
裂け目の奥では　何の喩えにも為り換われずに
二〇二三年九月一日

にしろ
何が何に為り換われないのもまやかしに違いなく

なら
何が何に為り換わってもまやかしなのかとなると
俄に　そのまやかしからしてまやかしに違いなく
な　違いなくこそ間違いなくまるで狂ってそうで
けれど何の狂いも何処にも見付からず　の
何処にも　の何処から何処までが何処かも知れず
な事では　何の狂いも見付からない程
何処までも狂って行くしかなさそうな　それは
何かのあやふやな喩えの奥でも覗き込むような　な
覗き込む姿を奥まで覗き込まれて仕舞うような
ぁあ　そんな奥まで覗き込まれては
動きも止まれも出来ない儘に身を裂かれるしか
無い　な
無い　だけが切り取られ跳ね回る　その
何の狂いも無さこそ狂ってようか　なら
そこに狂いは間違いなく見付かった筈だ
で見付かった筈の狂いは何処だろう　と
探し回って見付けられない姿はさぞ狂っている違いない

けれど
な　違いないこそ間違いなくまるで狂ってそうなら
な狂いごと　見付けられるか見付けられないかも
あやふやで　な
あやふやが　狂いもせず　あやふやな儘な筈もなく
二〇二三年九月二日

あやふやはあやふやなせいで立ち処に引き裂かれる
引き裂かれたあやふやはもう引き裂かれない　なら
引き裂かれないあやふやが引き裂かれたのか　な
あやふやなら引き裂かれてはいけない筈だが
引き裂かれている　あやふやなせいで
狂っているとは　この事か
とは　どの事なのか　こそ
あやふやでは　きっと
あやふやなどとはまるで違う事が幾らでも引き裂かれ

それは
引き裂かれるせいで引き裂かれ　な
引き裂かれたら引き裂かれには何のあやふやも除かれて
動きも止まれも出来ない儘に身を裂かれるしか　無い
のなら　何一つ狂っていない
にしろ　何一つ狂っていないのでは　この
狂っていない　には果てが無い
果ての無い狂い無さとは何だろう？　それは
果ての有る狂い無さを全て消し去っても
傷一つ負わない狂い無さに違いないなら
果ての有る狂い無さにすれば
果ての無い狂い無さこそ果ても無く狂っていよう
いや　こんな事は知り尽くされて居たし
果てて無く狂う果ての無い狂い無さの姿も
疾っくに隈無く鮮やかに見えて居たろう
それは
遠く燃え盛り遠くを焼き尽くす火の姿だったかも知れないし
近付いて触れられもする火の燃え痕の姿だったかも知れない

けれど火の姿など外面で外面が何時とも知れず姿を消すなら
それは風より透け何処へでも行き来出来るなら火より危うい
で
果て無く狂う果ての無い狂い無さが
果ての有る狂い無さを果てなく狂わせる
いや
果ての有る狂い無さがどうして果ても無く狂えようか
果ての有る狂い無さな儘に毀れて行くだけではないか
二〇二三年九月三日　外面（そとづら）

穴に居た　それは　そこに
ずっと居られる穴　それは
穴は窒がっているからで　それは
窒がっているから穴で
窒がっているからずっと穴に居られる　な
穴は常に前に拡がって隈無く見渡せる　なので

その前の後ろに後ろが有るとも知れて　その
後ろに穴が有るとも分かる（
何故ならそこは窒がっているから）それとも
後ろに有るのが全く穴で（
何故なら全く窒がっているから）それなら
前の穴は後ろの穴の続き　それとも
後ろの穴の続きが前で　そこに後ろの穴が映し出され
穴がどんな姿かを知らせているか　な
穴なら
間違っても開けられてはならない
「穴を開ける」とは何の事だろう
どんな穴にしろ開けられた穴など穴では無い　いや
「穴を開ける」事など出来ない（「穴を開けた」などと
言う奴は何を言っているか分かってないし
何を為たかも分かってない）その窒がっているから穴な
穴が直ぐ目の前で開けられるとは何
「穴を開ける」事も出来なくて　穴に穴が開けられたとは何
いや

開けられた穴など穴では無い　窒がっているから穴な
穴は「穴が開けられ」たかに　毀され失われ
な事でもう前も後ろも知れず
ここは何処だろう　何処に居るのだろう
穴の外だろうか　けれど
穴が失われては　穴の外も無いのだろう
塞がれた穴の外に穴の外が有ったのかは知らない
塞がれたからは外から塞がれたのかも知れないけれど
塞がれたからには知らなくて済む　ずっと居られる穴ならば
けれど穴は毀され　なら穴の失われた何処かに居るしか無い
それが何の事か分からなくても　他に無い
他に無い処なら　そこはそこでまた塞がれ　穴か…
ずっと居なければならなくても
ずっと居たりしてはならない穴…　いや
そんな処が穴な筈は無い　開けられた穴など穴では無い
開けられない限りの塞がれる限りな穴は一つ限りに戻らない
二〇二三年九月四日

細過ぎ長過ぎ硬過ぎて何処にでも何処までも刺さる…
なものが何処にも無いとしたら何処に何が有り得よう
な何かを何処かに探そうとしている頭なら有りそうで
いや
ない頭が有るにしろ　無いも同じに
細過ぎ長過ぎ硬過ぎて何処にでも何処までも刺さる…
なものが刺さり過ぎ　数知れず
それとも何処までも刺さるなら
一つ限りかも知れなくに　それとも頭が
一つ限りなら　何が数知れず刺さろうと
一つ限りに約まるらしいけれど　な
らしい　が一つ限りとは限らない
らしい　は　それだけで
細過ぎ長過ぎ硬過ぎて何処にでも何処までも刺さる…　な
らしい　にばかり踏み躙られれば
らしい　の全てを呑み尽くして

裏返るしか無かろうけれど　何が
？　と　一つ限りの厚みと重みを携え
細過ぎの裏返しで長過ぎの裏返しで硬過ぎの裏返しで
何処にでも何処までも刺さるの裏返しな
それより裏返りようの無い　（何故なら
それはそれ限りなので）　な
それが　狭過ぎる頭の縁から縁を　上へ上へ沈む形で
狭過ぎれば動けない筈が　酷くゆっくり
僅かに傾くかに（けれど　それ限りでは傾く筈もなく
）有りもしない裏へ裏へと　表へさえ回り込めるかに
動いている　唯
動いていて　それはそれで有るしか無いに違いなくに
二〇二三年九月九日

目を瞠れ　衝き上がってるぞ
けれどその衝き上がってるぞは透き通るようで

けれど透き通れば消え果てる筈が右から左から
衝き回されるかにぐりぐり圧し迫って来ては
右と左に挟まれ滑滑と磨かれた狭い中を
細い息を吐くばかりに　それとも
細い息は見誤りで　それは
瞠られた目から搾り取られる
血で無いなら
血より奥から浸み出す
如何にも燻んで空っぽな
冷たく丸く厚ぼったい柄が陰の濃さでも競り合う
そんな形で溢れて形に為らない　いや　やはり
そんな形に為らない形の細い息　それとも
細い息を吐き吐き　透き通る訳には行かず独り
右も左も失せるその先の
もう一つの　細い息を吐くか　唯
息だけで立っていなければならない姿の脇を
するりと行き過ぎなければならない　唯
形に為らない形

に違いないのなら　急げ
目を瞠れ　衝き上がってるぞ
は　まやかしで急ぐ事も要らず
形に為らない形もまやかしと見切れば　それは
形そのものでそれなら確かにそれへは
目を瞠るしか無いにしろ　衝き上がってるのは
そんなそれの脇をするりと行き過ぎる振りで
繰り返し荒荒しく重たげに戻って来ては
細い息を断ち切り切り刻み透き通らせて行く
形に為らない形そのもの　なのかどうか
な定め難い事へばかり目を瞠らされっ放しでは
冷たく丸く厚ぼったい柄が目の底まで食い込んで
目など疾っくに如何にも燻んで空っぽで
二〇二三年九月十日　柄（がら）

尖っていては掴めない

指を幾つか無くしたけれど
手ならまだ生えていように　で
それが
尖っていて動くのは何かを画きたい為か
で無いなら画かれた何かを引き裂きたいか　ぁあ
画かれたものなら数知れず絡み合ってよう
絡み合いい過ぎて隙無く粘粘と重そうに軽く
狭いせいで酷く明るい裂け目に詰め込まれ　けれど
どれも今を限りかに輝き悶え悶え尽きれば
穢れた様を晒され　それとも隠されるのは
輝きの今を限りが　輝き続ける儘だからで
ならば今を限りが　まるで誤ってようかと
今より遠い限りな　古い何時かのそれとも
今がその儘に古い何時かなのではないかと
ずらす
ずれていては掴めない
指も手も始めから使い物にならなかったと
今更知れたところで穢れた様の輝き続ける儘なのは動く筈も無い

な　動かないせいで
それに為り換わる似たものを探すしか無いけれど探すまでも無く
それは同じ穢れた様の輝き続ける儘を繰り返し見付け直すばかり
さっさと目を逸らせ　そしたらお前がお前に知れなかった何かに
為り換わって動かないそれに為り換わる似たものにだって
為　れ　る　だ　ろ　う
と　声で無いなら
身の奥のけれど薄皮を捲って直ぐの痛みが切り刻まれる辺りの
何にそう言われているか　で
目を逸らしたか　逸らす程の目など有るか無いか　と
空っぽな目は動かずに　輝きもしないし恐らくは穢れてもいない
ずれていては目も始めから使い物にならないらしい　な
目の届かない処で尖っていて動くのを已めないのは何
何を為たいでも無さそうに　輝きもせず
穢れていないそれだけが
今より遠い限りには　酷く穢れているに違いなく
二〇二三年九月十一日

尖る限りに尖っただけの儘に遠ざかり　後に
何もそれに為り換われないのなら
何一つ残らない　な
処で独りなら独り　でないなら独りでも無い
独りか独りで無いかを独りでは決められない程には独りで無く
果てなく独りな
もう出来損ないでしか無い　身一つの
厚み
それとも　な
厚みが
身一つを離れ
独り
何処からも見られ奪われ仰け反り裏返る柔らかな姿を硬く守り
時を遡れるだけ遡り見られ尽くされ奪われ尽くされたからには
もう見られも奪われもしないだろう　独り仰け反り裏返る姿の
いや見られも奪われもしないなら姿も無かろう　な

無かろう姿が探られ続け画き採ろうともされる　にも
絶えずそれがそれで無くなってそれとしか知られないそれでは
唯一つ頼れるのは身一つを離れた
厚み
へ戻るしかないけれど戻れたには
戻れただけの僅かに道筋などが跡を残してよう　な
何一つ残らない
とは異なる成り行きが開けて来るなら
厚みは
姿とは異なる　見られ奪われるのとも異なる　のなら恐らくは
厚みとも異なる
必ず独りでも独りで無いのでも無い
それがそれで有ってそれにしかそれとしか知られないそれ　で
先も後も無い処で行きも戻りもしないのなら　な
それへは為り換われたのではないか
二〇二三年九月十二日

その場限りなその限りがその場に閉ざされる中で
色色と一つ一つが棘のように透き通るなら　一つ一つの
色色は色色に入り組んで乱れるしか無いにしろ　な
乱れに少しの狂いも無い
狂い無い乱れでは付け入る隙も無い　なので何処までも
透き通るしか無い　と見切ればその
透き通る中に閉ざされた　色色な色なら色などが現れる
しかし何の為に？
色色など要らないだろうに
何処までも透き通ればそれに尽きように
色の色色はその妨げでしか無くに　な
色の障りが　色色を吹き消して唯
障りが
酷い速さで伸び縮みを繰り返して
狂い無い乱れに挑み懸かる
それだけで　他に何一つ見当たらないのなら　な
それは

それと少しも距たりようも無いながらに
それに何の痛みも覚えない
けれど痛みこそ有ろう　全ては痛みだ
とさえ言える程に　その
全てを無い事にして仕舞うのは狂い無い乱れの他に無く
その場限りなその限りがその場に閉ざされるのも
狂い無い乱れのせいで　な
狂い無い乱れでは酷く狂っているし乱れる限りに乱れている
とさえ言える程に　何でも有って何でも無かろうけれど　その
何でも有って何でも無いのこそ
狂い無い乱れとしか言いようの無い事なら何処もが
何処までも閉ざされる限りで逃れようも無かろうに　なら何故
根が芽を上に向かせるしか無いように
逃れようも無かろうに　などと　前を向こうとして仕舞うのか
逃れようも無かろうに　とは　この先に逃げ場を探る心だろう
二〇二三年九月十三日

これまでも犯される怖れを知らされて居たろうか
灼き尽くす火に息吐く間もなく犯され　その儘に
犯され続けるらしい怖れが溢れて止まらないなら
前を向くしか無い
先を見るしか無い
惨めさ
へ擲たれ沈み込む
な犯される怖れも疾っくに何処へか棄てたらしく
に
辺りを（辺りとは何か）と見回すと嘲笑うように
辺りが（辺りとは何か）と現れるけれど　な
辺りに色色と色を着けるのが
前を向くしか無い
先を見るしか無い
惨めさ
の他に無いのでは辺りを見回したのは誤りか
色など直に透けて　消えて仕舞おうし

消えないのなら消えないだけの事で　色より
前を向けているか
先が見えているか
もあやふやでは惨めさもあやふやで　にしろ
な
惨めさへまた犯される怖れが戻って来そうで
それが消えようが消えまいが色と混ざり合い
あやふやは更にあやふやなら
どちらが前で先かも色に紛れ
惨めさ
は犯される怖れだけの中へ掻き消されて行く
に　今更に
残された犯される怖れとは何だったろう　と
辺りを見回しても辺りなど跡形も無くて　唯
びっしりと溢れて来る　その何とも知れない
びっしりなだけがびっしりと溢れて来るのが
惨めさの骸で無いとしたら何なのか
惨めさの骸だけが溢れて止まらないのなら

犯される怖れこそその中へ掻き消されよう
二〇二三年九月十四日

消えても消える度に甦る　何が？
も無く　有ったとしても知りようも無く
より狂い無く　必ず甦る　何が？
も無くそれともそんなる　何が？　が
更に狂い無く　必ず甦る　けれど何故？
と　どちらかを向いて尋ねようもない
な事は　疾っくに分かり切ってようと
分かり切ってると分かり直す程にその
分かり切ってる事に愈愈馴染めずその
馴染めない様だけが拡がり已まない一つの眺めかに
目も眩む程に遠く隅隅へと眺め渡されようと遠い程
な事は　酷く近くに迫って何処か脅すかのようでも
それ切り何も起こらない　そうだろう

な事は　疾っくに分かり切ってるから
でまた消えても消える度に甦るそれだけが必ず甦る
なそれではそれとは異なるもっと馴染めないそれに
為り換わったろうか　そうして
為り換わってても為り換わる度に甦る　何へ？
しか無く　で無かったとしても
酷く遠いせいで近過ぎる一つの眺めかの砕けた痕が
より狂い無く　必ず甦ろうか　な
必ず　もまた砕けるしか無く
必ず　とは異なる馴染めない様を繰り出して来よう
二〇二三年九月十五日

一つの眺めかの砕けた痕が砕けて一つの眺めかな痕の砕けた痕を砕く
な事が繰り返される処は剥がれて崩れ落ちて行くしか無いけれど
それをそう眺め下ろすのなら身一つは身一つで転げ出そうか
狙いを定めろ

それが答えだ
それだけで身一つのあやふやは避けられよう
一つの眺めかの砕けた痕の成り行きのあやふやも拭い去れよう
狙いが定まりさえすれば全ては狂い無く進む
で
狂い無い出鱈目に狙いが定まれば　その
何のあやふやも撥ね除けた先に
あやふやだけが爆ぜる限りに爆ぜ捲ろう
な様こそ狂い無く狂い無かろう
それだ
それに狙いを定めなければならないし狙いを定めるしか無く
定められた狙いに
襲い懸かれ
奪い取れ（
それは答えでも無い　答えなど要らない）
で　何を奪い取れたろう
一つの眺めかの砕けた痕が砕けて一つの眺めかな痕の砕けた痕が砕かれる
な痕なら

走り抜けろ
な痕こそ　お前が身一つに走り抜ける為にだけ予め設えられたに違いない
遠い限りに遠い処で奪い取られた火によって
それだ
な火の幻染みた姿に狙いを定めなければならないし狙いを定めるしか無く
二〇二三年九月十六日

酷く遠いのにぼんやりともあからさまに近さを匿う辺りに
さも甲高いような（甲高く聞き取れたのでは無く）
親しい限りに馴染み深い
さもあやふやな暗がりを裂くように（暗がりが裂かれたのでは無く）
そっと小さく
慎ましさを極めて
暈ける限りに已まないで消えそうにも直にさも鮮やかに甦るらしい声に
耳を澄ませているに違いない　それとも
耳を澄ませるのとは違う事が　そこに

声を鳴らしているに違いない　のなら
二つの違った違いないが同じ　そこに有って争うように揺らいで
な危うさに満ちたあやふやな暗がりに
親しい限りに馴染み深い声を鳴らしているに違いないにしろ　な
また違った違いないに搦め捕られて行くのは
誰　な
誰も　居ないのなら　いや　誰が
誰を　誰も居ない　と言うのか　と問う
誰も居ないような（必ず居ないのでは無く）
ふと過ぎ去るようで中中過ぎ去らない僅かばかりの粘りを含む
酷く遠いのにぼんやりともあからさまに近さを匿う時の中を見詰める
な閉ざされた時の手前で何の時にも入り込めず触れられず
な閉ざされた時より先に暈ける限りに已まないで消えそうにも
その儘に閉じて行こう　間違っても声など上げられず
なので親しい限りに馴染み深い声に声を掛けようもない　な
それが　そこに有るしか無いのなら　それは
声を失い時とも距てられた誰かの誰もそこに居ないような姿かに
浮かぶように現れるようでも現れるより先に

過ぎ去らない時など疾っくに親しい限りな声に呑まれてよう　な
声独りだけは　恐らくはまた
暈ける限りに已まないで消えそうにも暫くすればさも鮮やかに甦ろうか
二〇二三年九月十七日　親（ちか）しい

暈ける限りにも声独りなら裸で丸まる身を裂くように
暈けた儘にも切り分けられよう　声を
それとも声は独りの奥へとも逃げ去り
切り分けられたのは透き通った声の　脱け殻か
な脱け殻さえ脱け殻の向こうへと逃げ去るなら
入れ換わりに
動きを塞がれ　その唯ふわりとした様を
声独りの透き通りを引く継ぐかに透ける限りに
内へと小さく脹れて閉ざされる風を映し留めたような
それでも　それが何だろうとやはり
暈けた儘にも切り分けられようと身を投げ晒している

な身など動かない風のように散り果てても
暈けた儘にも切り分けられた　それは
そのようにも　その唯ふわりとした様で
誘うようで　な
それがそう有る限りなら　誘われるしか無く
それをそれとも知れずとも構わずに　それを
そっと
切り分け　ぁあ
そっと　って何だ
そっと　なんて荒荒し過ぎて何もかも毀して仕舞おう
けれど　切り分けられはしたろう　その先に
声か声の脱け殻かな微かな匂いを　追っては行けよう
な
追って行く動き限りには　それを
擦り抜けもして
二〇二三年九月十八日

擦り抜けたなら絶ち切られ絶ち切られたからには擦り抜けるしか無い
の繰り返しさえ絶ち切られ絶ち切られるからには
始めに断ち切られた処へ戻るしか無い
そんな処は無いか有ったところで今更
そんな処は擦り抜けて仕舞うしか無い
なら無いで擦り抜けて仕舞う先も絶ち切られるしか無い
にしろ　その
繰り返しも繰り返しの絶ち切られも
燃え尽きたかにその兆しも無いなら
な
擦り抜けようも無い何の動きの兆しも無い
そんな処を
唯一つ限りかに眺め渡すしか無さそうにも
そんな処を微かに見付けたようでも
凝っと見詰める程にそこは見る見る縮んで縮み果てれば　その
縮み果てた処に行き果てて
縮み果てる事など出来ないと知らされるなら

そんな処は間違いなく嘘でも擦り抜けるしか無い
な嘘の擦り抜けに嘘で無い身は磨り潰されようけれど
な磨り潰される身など知りようも無く
知りようも無い身なら無かった事にも出来ようか
と　顧みられる身は
その身に擦り抜けられたかに空っぽで　それとも
身など始めから裏返しに剥かれたかに　空っぽで
いや　空っぽこそ嘘だ　嘘を嘘の儘に
空っぽで無い身を空っぽで無くそうとする嘘に囚われ
二〇二三年九月十九日

知り尽くされている
他には何も無い　いや
他には何も無い　と見えて仕舞えばもう
知り尽くされている他には何も無い
から　引き剥がされ　その

引き剥がされている
他には何も無い
何から何が何に拠って引き剥がされたか
知り尽くされている他には何も無い
から　引き剥がされては
何も知れない　いや
何も知れない　と見えて仕舞えばもう
何も知れない
他には何も無い　と
知り尽くされるしか無い　にしろ
何に拠って？　だけは
他には何も無い　の外にでも有るのか
知りようが無い　としか
知りようが無い　な
知りようが無い
他には何も無い　と
知り尽くされる　にしろそれは
知り尽くされている

他には何も無い　とはまるで異なるけれど
何に拠って？　その
何に拠って？　に拠って
それともそんな
何に拠って？　とも異なる何かに拠って
と
知り尽くされている
他には何も無い　いや…
いや　と言えるかどうかだけは知れないで
二〇二三年九月二十日

知り尽くされている事だけが繰り返され
その他の事は起こらない　それとも
その他の事が起ころうと　それは
知り尽くされている事の内にしか無い
果たしてそんな事か　いや事として

事が起こるには
知り尽くされている事だけが繰り返される度に
その他の事は起こらない内に必ず　新しく
その他の事が起こるしか無い　そうして
知り尽くされていた事とは異なる事が知れて仕舞うのでなければならない
けれど　そんな事もまた
知り尽くされている事だけが繰り返される事の内にしか無い
な事の繰り返し　しか無くて
な事の繰り返し　を繰り返せて仕舞えるのは何故か（
繰り返しの繰り返しは　繰り返しと異なる悉くを必ず拒む筈だ
繰り返しの繰り返しに甘んじる何をも拒む筈だ　そうしてもう
何も残って居ない筈だ）なのに繰り返しの繰り返しに甘んじる
誰かが居残って　繰り返しの繰り返しと向き合えるのは何故か
新しく起こる事に望みを繋いで仕舞うからか
他に無いならそうする他に無く
けれど　そんな事もまた
知り尽くされている事だけが繰り返されるより他の事では無い
のなら少しも

新しく起こる事に望みを繋げられてなど居ないし
そう思い込んだとしても虚しいだけな筈だ　なら
な誰かの苦し紛れに捻り出した
繰り返しの繰り返しは紛い事だ　それとも
な紛い事を受け取るの強いられた誰かが独り
繰り返しの繰り返しを繰り返し繰り返すしか無い
紛いの考えに　繰り返し思いを巡らしているだけか
けれど　そんな事は何だろう　それとも
そんなのは事でさえも無いような　いや
事とは何だろう　何の事さえも無かったとしたら
二〇二三年九月二十一日

事など棄てて居た　それとも
棄てたので何かが　事になって
な事を棄てたのを　忘れて居たにしろ
事が棄てられたのには違いなく

な事を覚えて居るのこそ怪しく
怪しいなら棄てるに限るにしろ
怪しくて棄てようも無いのなら
棄てた事を忘れて居た事を覚えて居る怪しさと
即かず離れず（の裏返る）即きっ放しの離れっ放しに
係わり続けるしか無さそうな事は
事か
な事に縛られ　それとも
な事を進んで縛ろうとしなければ居られない事に縛られ
囚われ
そうだ　囚われて居るだけだ
この事一つを忘れて居た事に
身を擲たなければならない身
は
囚われてさえ居ないようで　抑も
身など疾っくに棄てられて居たろう違うのか　な
身とは何か　と見回せる限り見極められる限りを見尽くす　と
ぁあ　それは何だかぐるぐると見えて来るけれどぐるぐる　と

見尽して見果てない事がぐるぐる回っているだけなようで
あぁ　唯こんな事なら確かに事かも知れないなと　な
事なら事に縋り付く身など見付かれば望みも繋がろう　けれど
けれどばかりがぐるぐる回る…
回る下に透けて見えるようなのは　何も透けて見えない事
の他に何も無さそうな事ならきっと身はもう　な事の中へ
突き落とされ溶けて透ける儘に透ける中をぐるぐる回ってに
ぐるぐる回るのって何の事だっけ？　と　何の事だっけ？は
ぐるぐるに追い付こうとぐるぐる躍りぐるぐる揉まれては　な
ぐるぐるに望みを繋ぐ事に囚われ
事ばかりが消えずに忘れられずに
二〇二三年九月二十二日

事の中を通りに通り
ぐるぐると掻き分け
ぐるぐると縺れに縺れる事共を解きに解き

通って行くしか無かっただろうに　一つも
な事は知らなかったし今更知れたところで
な事などさっぱり覚えて居られないと知れ
けれど
知れる知れない　覚えて居る居ない
の境目が酷くあやふやでそのあやふやに目を凝らせば
知れると知れない　覚えて居ると居ない
は何がどう違うのか　まるで分からなくなっているようで
その違いを見極めようとすればする程に
怒りに駆られたような　酷く小さく熱く火照る身はぐるぐる
ぐるぐると酷く狭い中を　躍り回り駆け巡り
怒りは暗く弥増すようでも　それはそれを見下ろす目が虚ろで
凍るように止まった儘だから　ではないのかと心付くと
その目を目が見極めようと目は　目の中へ切れ込んで逆様を裏返る
で
事は何処だ　な
事の中を通りに通り
ぐるぐるぐると掻き分け　いや違う

かに足掻けば足掻く程に事は　目の中から目の裏へ回る側からさえ
消えて行く　な
事は何処だ　な
事だけが事の中へ切れ込んでは逆様を裏返る　いや違う
分かってるぞ　そんなの目のせいだって
目が目を目の中に映してそんな事だって
けれど
な事が真上を向いて　目が目を映す目を
突き刺して来てないか
それに少しも目を凝らせられないのなら
もう目は事に潰されてないか
二〇二三年九月二十三日　解（ほど）き

潰された目は
目と同じ傷を探す
けれど何も見付からないのは　目が見えないせいでは無く

目には元元傷一つ無いからでな
潰された目に映るのは　透けるでも透けないでも無いせいで
ずっと黙りこくる儘な　唯一つ思い描かれる帰れそうな処で
けれど何も見て取れないのは　目が潰されたせいでは無く
帰れそうと思えて仕舞う処は　潰された目を切り刻まれるか　いや
潰されて切り刻まれるのなら　楽しくて目も躍り始めようか　な
切り刻まれる夢位は見せられ
潰された目を瞠らされ　その
潰された目の痕が傷だらけなのを曝され
潰された目がその傷の一つ一つを　目で
切り分け　その形を確かめ何処までも並べて行かなければならない
な処に違いない　のも
きっと見誤りで（潰された目で何を見誤らずに見極められよう）に
潰され瞠らされた目は　傷そのもので
ならもう　帰り着ける唯一つ限りな処へ帰り着いているに違いなく
見るのなら　その
傷で見る
のなら

元元傷一つ無い目は　傷で見られた傷など須く癒やせようか
楽しくも無く目が躍る筈など無く　黙りこくって　な
目が
透けるでも透けないでも無い処を
透けるでも透けないでも無く　一筋の流れる傷のように過ぎて行く
‥潰されるのは　ほんの　そんな事かとも
二〇二三年九月二十四日

傷を見付けたけれど　知っている限りのどの傷とも異なる
とも直ぐに心付いて　傷は
見誤りと分かれば
その分かるのが誤りで
見誤り誤りと分かればその分かるのも誤りで
その見誤り誤りが誤りで分かり誤りが誤りで　と
そんな事に為るのは　他に同じ傷が思い当たらないからで
けれど

傷を見付けたのは誤りでは無い　それとも誤りか　にしろ
傷が誤りか　見付けたのが誤りか　誤りで無いのが誤りか
いや　きっとそのどれでも無い何故なら　この傷は
知っている限りのどの傷とも異なるから　と
それ…
知っている限りのどの傷とも異なるそれを見付け直そうと
と
知って居る限りのどの声とも異なるなら声で無いかも知れない
な（けれど声にしては酷く　けばけばしくけばけばしいとも異なる）
それが込み上げ
そんな込み上げも知っている限りのどの込み上げとも異なろうかに
知っている限りのどの傷とも異なる
それ…の陰に隠れるかに掻き消され　ぁあ
それでやっと　何か同じ傷かそれとも　どの傷とも異なる異なりの
同じ異なりに　心は馴染んで行くようでも　な
馴染む心こそ　知っている限りのどの心とも異なる　な
異なりだけが　心へ落ちるとも心付こうかに　それ…は
見誤りと分かれば　それは

二〇二三年九月二十五日

ぐるぐると知っている限りの同じ処を駆け回って居て
それともそんな事とは異なる事のせいかも知れなくも
ずるずると沈んで行く身一つを支えるのは身一つ　それとも
な身とは異なる　な身一つを距てた身一つの他の全てにしろ
な全てが　知っている限りの全てとは異なる限りに異なるも
な事では
異なる限りの異なりも　何の異なりかもあやふやに消え去り
それとも　消え去るからには必ず消え去り去らずに現れ続け
現れ続ける儘に知らず消え去ろうとする　な
知らず
な事の現れに望みを繋ぐ
それとも
な繋ぎたい望みに誘（いざな）われるかに…　と
かにも

望まれた望みを誘い込まれるように覗き込むと
それとも　覗き込んだかに望みへと身一つを繋げたかで
ならば　覗き込んだ中に身は映ろうか　な
身の中へ身は墜ちて行くか　とも
身構える構えの底で底は底から引き剥がされたろう
その奥に剥き出されるのは望みなど始めから偽りだった
それとも偽りの望み無さが渦を巻くようなので幾ら
望み無さが偽りだろうと　その渦を巻くのからは
僅かにも目を逸らせられないのは　僅かにも偽りでは無い
な偽りの渦の中に身一つ限りが映って居ようか
と怯える身は何処なのかと顧みるも
そうして顧み続けなければならない身が　そっくり渦で
と渦が渦を覗き込んだか　渦に渦が映るのに囚われたか
な　いや
な事では　な事で済む筈も無くにも
見失われたからには渦に呑まれたろう（何故なら渦しか無いから）
身が恰もその儘に渦しか無い渦の為かに渦で有るしか無くにも
な渦ごと　それを見るに耐えない偽りと見て仕舞えば

な渦ごと　直ぐ様引き剥がされるその底の底無しかにも
傷だらけか血塗れかそれとも少しもそんな事では無い程に
偽りの望みと偽りの望み無さが惨めに溶け合った　ぁあ
それは渦とも見えないなら間違いなく渦では無いけれど
ならば偽りの渦か　にしろ　な偽りが渦を巻くので無いなら何か
な　何か
な　それがそれがそれで有る為だけにそれは
ぐるぐると知っている限りの同じ処を駆け回って居て
二〇二三年九月二十八日

十月

森なら森の　それとも
啀み合いながら絡んでは縺れる木木の根よりずっと下を流れる水なら水の

腐ったような濃い匂いの殖え続け　森の至る処に必ず備わる
薄っすら陰の姿を窪ませる　そこに
居ない　そんな
居ない誰かが数え切れずに　どうにもそこに
居ないのは　測り知れずに　恐ろしくないか　だってそこに
居ないのなら居てはならない処に居るしか無かろう
ならここが　その居てはならない処であるより他は無かろう
数え切れず計り知れずにも　全ては目が眩むしか無くに明らかでは…
とも
な恐ろしさは　恐ろしさとはまるで異なる
なら　突っ切って行くしか無いのは突っ切ってなど行けないからなら
そこに居ない事に戻るしか無いのは戻ってなど行けないからにしろ
居るしか無く　居てはならないここなど
無い事にして（無い事にするのは無い事に出来ないからにしろ）
偽りの望みと偽りの望み無さを狂い無く分け隔てる
その為の　狂う限りに狂うしか無い狂い無さを
偽りの望みと偽りの望み無さに溶かし込むしか無い
そうするしかない　にしろ

そうするしかないのはそうするしかないのでは無いからでしか無いのなら
狂い無さもさも狂い無さげに脆く崩れ去ろう　その先を覗き見られるのは
何も覗き見られなど出来ないからにしろ　な
出来ない儘が望みなら　それは
偽りの望みとも偽りの望み無さとも異なって
二〇二三年十月十日

青みの仄かに浸みて透けるかに深まるのを見て回る　その
青みだけは切り落とされず接がれて行く　その
青みだけが切り落とされずに唯そうして
青みに違いない
青みの他はどれも疾っくに切り落とされ
青みとはあべこべな色かに何処までも染まるしか無い
のなら
青みは独り何処からも冷たく離れた汚れ物にも見えようか　と
目を凝らせるのか凝らせられないのか　その

目に目を凝らすしか無いようでは　目と
青みか汚れ物かとも冷たく離れて行くしか無い
なのでこそ
青みは
青みに違いない　などと心付いたのが徒で
青みは崩れて散るように消えて行く　その
消えて行くのだけは消えずに残る　なそれに
目を凝らすしか無い　などと心付いたのが徒で
青みの後を追う形（なり）で
目もまた崩れて散るように消えて行くけれど　その目の
消えて行くのだけは消えずに残るかどうかに
目を凝らせる目は残っていない　などと心付けば
冷たい青みの中に目は　静かに死んだように
でさえ無いのなら始めから生きもしなかったかに
何の色にも染まらないなら何の色をも受け容れて
青みを突き抜ける先へなら　その
死ぬも生きるも棄てて　青ごと擲って行けそうで
二〇二三年十月十一日

青は已んでも（
青など疾っくに始めから無かったかに失せても）
青みは已まない　青みに限らずその
已まないものを追い已まないなら　追われるそれは
回り已まないで
知れない遠くまで　なのに
馴染みの同じ処で
回り已まない姿を凝っと潜ませ
潜ませる儘にも　馴染みの同じ処を密かに溶かして
重みに任される全てをゆっくりと沈み込ませて行く
かにも
回り已まないのは回り已まなくて回り已まないと唯
それだけで　已まない青みさえ消し去っていないか
な処に　うっかり已まない青みを追い回そうとすれば
回り已んだ青みが始めから青みでも無かったかに失せる

な　青みの青みを剥ぎ取られた重みが沈みも浮かびもせず
回り已むか已まないかなどは棄てた　その先で
硬く強張って角張って揺らぎ已まない
重みの知れない
隈無く火の色に染まりながら
火の色など易易と振り払って
知れない重みだけが已まないのは何か
二〇二三年十月十二日

知れない重みを重みと知れるのは何か　それが
重みと知れる重みしか無いからなら　そしてその
重みに就いて重みと知れるより他に何も知れないからなら
それは　その
重みに拉がれ粉粉に磨り潰されるのを
その儘に受け容れるしか無かろう
かにも

な事の起こる兆しも無く
重みと知れる
知れない重み
の
重みが重みを絶ち切る音に準えられる　それともその通りに
絶ち切られるなら重みから解き放たれる音に準えられる
重みで無いとは知れるだけでは何とも
知れない　その
回り已むか已まないかを蒸し返そうとでもするかに
知れるも知れないも欺く姿を
重みと知れる
知れない重み
に
準え　それとも
準え損なうなら　それは
余りに酷くに在り来たりで受け容れようも無くに
絶ち切られ已まないなら絶ち切られようも無くに
な

それをそれと知るのは
重みと知れる
知れない重み
にしろ
な
重みと知れる
知れない重み
はもう　僅かにしろ穢れてよう　その
穢れに溺れられないか
二〇二三年十月十三日

砕けた森としか見えない
砕けた森は偽りとも見えながら
そうとしか見えないなら
そんな森に溺れようとするしか無い
溺れようとするのも偽りと知りつつ

試しに裏返してみてはどうか
偽りは裏返ろうか
偽りを裏返そうと　易易と
それも裏返ろうなら偽りな儘ではないか
裏返るのは砕けた森か
砕けた森を裏返すなら　その
砕けた姿さえ砕けて森ごと散り失せるだけではないか　なら
砕けた森に溺れようとするしか無く溺れようとするのを
裏返すしか無い　で
何が裏返ったか　と見るとそれは
何が裏返ったか　としか見えない
な事ではもう何も裏返せないのではないか　なら
それを
それとはまるで異なる何かに置き換えられようか　いや
置き換えられないなら止まった儘で　止まった儘では
置き去られ忘れられ朽ちて行くしか無く　それが嫌なら必ず
置き換えられなければならない
それと

置き換えられるのが何だろうと　その
置き換えた何かも偽りとしか見えない
偽りと見えながら
そうとしか見えないなら
そんなそれに溺れようとするしか無い
溺れようとするのも偽りの　その
偽りも裏返しようもない偽りと知れて居るなら
な偽りにもうすっかり溺れて居るのでは無いか
二〇二三年十月十四日

砕けた森とは何だったか
何だったか
と思い出そうとされるのは唯
砕けた森しか無い　（それが
砕けた森の全てか　何故なら
他に思い出そうとされるものも無いのなら）

で　そのように
砕けた森は　何時も　それともほんの時時
衝き上がって来るにしろ
衝き上がって来るのは唯
砕けた森しか無い　のかどうか
何時でも何処でも何だろうと尽きなく衝き上がって来てそうだ
違うか！　ともうそんな違うか！　も衝き上がって来てようし
それともそんな事が
砕けた森の唯一つ
思い出せる姿なのかも知れない（いや
かも知れない　なんて何時だって気安めでしか無い）にしろ
な唯一つの砕けた森に尽きるなら
気安めでしか無い事など何の事でも無く
砕けた森に尽きる事さえ何の事でも無くなって行く
な事が事の全てなら何も残る筈も無いけれど
砕けた森とは何だったか　は
一つも欠ける処を見せず
真ん丸な姿を艶めかせる　それともその

艶めく姿こそ　その
始めから全てを欠いていた姿なのか　と
砕けた森へと溺れよう溺れようと傾ぐのは何

二〇二三年十月十五日

ほんの一時　解れて行くのは
青
青に拉がれるのは砕けた森　それとも
せめて砕けたと見るしかない程に　青に
どろどろに溶かされ流されれ　もう痕も無い
森だった処
なら
すっかり青くも有ろう筈が　何が色かも知れない程に
色が無い　いや
色とは何だろう
青だけが色なのだと言い切れば色に就いて全て言い尽くしたようで

言い尽くせる事など何の事でも無い　と
青ごと巻き戻せば　その
解れも巻き戻され
楽しげかに　青は
去って行くのなら
色と言う色を溢れ眩ませる闇だけが噴き上がろう　と
身構える誰も居ない　それが
青に拉がれると言う事だ　と
身構える誰も居ないと知れるのは
砕けた森の時を砕ける前まで遡る
火を怖れ遠ざけるしか出来なくて　色とも知れない
青を目に溢れ眩ませ真ん丸な艶めく姿まで青に染まろうかな勢いの
偽りの砕けた森を独り強いられ離れるしか無くにも
知らず裏返るかに青へ向けて時を遡るしか無い（
なのでそれは遡るのとも逆さな向きを向くしか無い）
森の砕かれるよりずっと酷く疾っくに砕かれ尽きたろう
な　それ限りに許される汚れ果てた色を纏わされる
目なら目に浮かぶ逆さな

青
を探す誰かを探す誰かな　剥き剥がされてはもう砕かれようの無い
姿
二〇二三年十月十六日　解（ほつ）れて

襲えるものは襲わなければならない
食えるものは貪り尽くさなければならない
届かない青を青で無くす為に（
青は青で無くならないからこそ）ぁあ　な
姿で居るしか無いとはけれど
姿で居るしか無い　とは始めからそんな事なら　な
姿こそ厭い憎み亡きものにしなければならない　な
しなければならない　は唯一つの望みだ　その
瑕一つ無い望みこそ
襲われ食われ貪られるには打って付けだったとは　それを
どれ程見尽くしても見尽くせなかったのは何故？

青を青で無くす為だけの青を青で無くせないから　いや
これは答えから最も遠いか逆様な答え　と分かったなら
真後ろを振り返り脇目も振らず真っ直ぐ突っ走るしか無く
その行き当たった処に答えは有ろうかにも　どうせそこは
青しか無い（それとも
全く青だけが無かったにしろ
その青だけが無いのは全く青でしか無い他に無い）とも
分かり切っているなら…
二〇二三年十月十七日

澄む程に何処までも暗い
水を潜るように
輪を潜る夢を今更かに思い出した
それとも　酷く水の匂いに侵された
輪を潜った思い出が　夢に紛れ込んだ
それとも　夢も思い出も何かの誤りで

輪を潜る声が聞こえた　そっと静かに
水を潜るような
声（は声じゃ無いよと声を上げているような）
は裏返るように遠く去る　それとも
遠く去るように裏返って　きっと
輪を潜るか水を潜るかな
思い出のような夢のような　何か
有り有りと甦る　それとも　声が
有り有りと甦る為に潜らなければならない
輪を探す夢を見る
水の匂いに噎びながら　ぁあ
濡れた唇を腫らしでもして「
水の匂い」などとも呟けたなら
水の匂いなど　さらりと潜り抜けられように　ほんの一言
呟くのさえ儘ならないでは　ざらざらとした
触れられる夢を絢って編んでは輪を作るしかない
それとも　そんな輪もどんな輪ももう
潜れる輪は全て潜って仕舞ったよ　と今更かに有り有りと

声

はその声を聞くしか無いのだとしたら…

二〇二三年十月二十七日

片足が腫れている　なら
もう片足は？　なんて
腫れた片足からは目を離しちゃいけなかったんだ　だってもう
片足は何処にも見付からないし見付けたくも無い　って事は
足は揃ってるんじゃ無いか　ってもう
風さえ追い抜く勢いで走り出してそうで　いや確かに
走れば走る程に行く先は有り有りと見えて来る先に
名は知ってたけれど色色な名が知られ過ぎて忘れて仕舞った
片足が腫れている　そのせいで何でも運んで来られよう
独り立ち塞がる姿が燃え上がるように燃え尽きるように
さも恵み深く禍禍しくも傾いて傾き直っては揺れて居て
そんな姿から逃げられるなら疾っくに逃げて居たろう

そんな姿に取り縋れるなら取り縋るしか無かったろう
で　どっちだったろう？　なんて
考えちゃいけなかったんだ　だってもうそんな事では
すっかり逃げて居るしか無くて
逃げれば逃げる程に逃げる先は有り有りと見えて来る先に
名は知れるも何も　名など付けられる筈も無かったろうな
足は揃えて飛び跳ねて何一つ運んで来られないも何も
飛び跳ねてさえ居れば他に何も要らなかろうな　いや
そんな事ではもう何も残って無かろうか
疾っくに腐って棄てられた
もう片足の他には
二〇二三年十月二十八日

少しだけ狭いのなら　その
少しだけ開いて行く　その
少しだけを毀して砕いて吹き散らせば

もっと狭くに狭くに　それは開いて行く
けれど開いて行けたところで
またもっと狭い処へ向かうばかりなら唯
開かれる為の　それは狭いばかりでそれは
行き着かなくちゃいけない処へ行き着けないばかりで　その
行き着かなくちゃいけない処へ行き着けない処がまた
少しだけ狭くて少しだけまた開いて行くばかりなら　その
少しだけは少しも毀したり出来なくて唯
狭いも開いて行くも　その
少しだけの為の　それは狭くて開いて行くばかりでそれは
そこが行き着かなくちゃいけない処かは知れないけれど
行き止まるしか無い処に違いなくて
行き止まるなら必ずそこは抜け出せる処で（
例えば息の根が止まるのも抜け出せる内で）
見上げれば誰かが駆け上った痕
見下ろせば誰かが転げ下った痕　かそれらしき痕が
どちらも少しだけ狭く　なら少しだけ開いて行くか
は見ようによって少しだけ見えたり見えなかったりでは　その

見えると見えないの行ったり来たりを繰り返す狭さ
を開いて行かないでは居られない　そのまた
狭さはどうだろう
どう出来るだろう　どう開いて行けたところでそれよりは
どう出来もしないのなら
望みを断たれたかのような断たれた望みが望みを
少しだけ狭くに少しだけ開いて行くような　その
もっと狭くに狭くに開かれて行く先の狭さったら
行き着きも行き止まりもせずに何処までも開かれ
二〇二三年十月二十九日

駆け上る程に転げ下る
これだよ　欲しかったのは
と言ってみる　とどうやら
な事は少しも言って無くて　換わりに
込み上げて来るのは込み上げるしかないもので　けれどどうやら

なものは少しも込み上げてなくて　ぁあ
なくて良かった
と言ってみる　とどうやら
な事は少しも言ってなくて　換わりに　ぁあ
何か匂って来て欲しいな　そしたら透かさず　微かな
その匂いに塗れて揉まれて酔い惚けて
これだよ　欲しかったのは
と言ってみられように　いや取り敢えず前のめりで
と言ってみてはどうだろう　と思うだけで言えないのは何か
嫌なものに塗れて揉まれて酔い惚けてるようで　ぁあ
これだよ　欲しかったのは
とうっかり言って仕舞ったろうか
二〇二三年十月三十日

十一月

瑕だらけで　なので匂いは
硬く強張って　剥き出しで　その唯
剥き出しなだけの中に抛り投げられ溺れ沈む身は　それは
ずっと昔なら昔の　昔でないなら何時の事でも無い
さらりと時は積み上がって　積み上がる程に愈愈さらりと
滑るように　それはその
滑るように　だけを求めていたかに
剥き出しで　な
剥き出しの中に閉ざされ溺れ果てるなら　自ら進んでまた
溺れよう溺れようとする　まだほんの幼い身は
幼さに酷く疲れ　その疲れに取り憑かれ愈愈幼さを翳して
幼さだけで疲れを乗り切ろうと何一つ目零ししない
濁り凍った涙でだけ拵えた玉を二つ目に入れるかな
幼さに溺れる儘なら心の向く儘に泳いで行けるかに
何処までも　その
何処までも　だけを求めていたかに　その

何処までも　を瑕だらけな匂いにそっくり取り換えようと
毀して行きたい（けれど何を？）いや
毀して行きたい望みなどまるで追い付けない程に
毀れて行くのは　知らず疾っくに
瑕だらけな匂いの取り換えられたなら　それは唯
剥き出しで　その
剥き出しを剥き出せば剥き出しさえも隠せようか
な
独り限りな影ばかり集め脹らませ空へまで昇らせ
重そうに瑕だらけで　それとも瑕そのものの姿で
な姿など一息で吹き消されようかと思う身こそ
吹き消されようか　な姿は我ながら酷く覚束なく
毀して行きたい（けれど何を？）　と
誰が振り返ったのか　誰も振り返るでも無いのか
な無さ独りが無さを振り返るなら誰も居ない中に
一息に吹き消されたがるより先に吹き消されたか
な
剥き出しなだけの中に抛り投げられ影も無い身は

身で身を身から分け隔て
そこが（何処が？）遥か距たっている事に傷付き
そこを（何処を？）ぼんやりと捜し回るばかりで
二〇二三年十一月十一日

動かせるもの
を一つだけ見付けた　その
　一つだけ　は動かせない　それを
　　　もの　としか言えないのも動かせないし　それを
　　　　見付けた　のも動かせなくて　けれど　それを
動かせる
のなら
動かせる　は動かない
動かないのなら　それはずっと必ず動かせる儘に
動かない　な事なので
それはきっと　一つだけしか無いに違いない

いや
一つだけしか無いに違いなくて
どう遣ってそれを動かせようか　仮に
動かせたところで　どう遣ってそれを知れようか　と
な事を
一つだけ見付けて仕舞うしか無いなら　その何を
動かせようか　けれど　それが
それ一つだけで
見付けられている儘に動かせるものなのは少しも動かない
それとも
動かせないものが動かせないのを
動かせるものを見付けたと態と見誤るしか無かっただけか
動かせないものが動かせないのを
見る事など出来ないばかりに
二〇二三年十一月二十八日

片　２０２３

著者　u_

© 2023 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published